

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第253集

都城市所在

おおうら

# 大浦遺跡

県道飯野松山都城線（都城志布志道路）金御岳工区道路改良工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書2

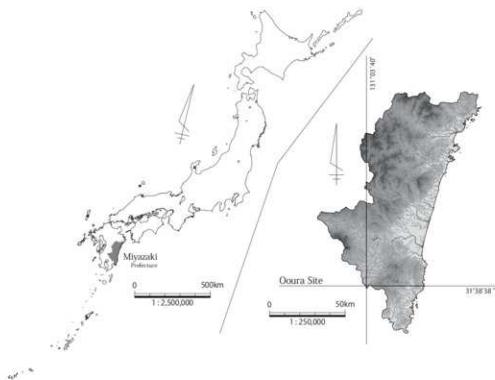
2020

宮崎県埋蔵文化財センター

都城市所在

おお うら  
大 浦 遺 跡

県道飯野松山都城線（都城志布志道路）金御岳工区道路改良工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書2



2020

宮崎県埋蔵文化財センター

## 序

宮崎県教育委員会では、地域高規格道路「都城志布志道路」の一部となる県道飯野松山都城線金御岳工区道路改良工事に伴い、平成30年度に都城市梅北町に所在する大浦遺跡の発掘調査を実施しました。本書はその発掘調査記録を掲載した報告書です。

今回報告する大浦遺跡では、縄文時代晩期の堅穴建物跡をはじめ、古代から中世の周溝墓や掘立柱建物跡など、複数の時代の遺構・遺物が確認されました。なかでも、円形周溝墓の発見や副葬品の中国産白磁の出土は、当時の地域社会における様相の一端を明らかにしました。

今回の調査で得られた成果は、梅北地区をはじめとする都城盆地南部の歴史を解明する上で、重要な位置を占めるものと考えられます。

また、本書や出土遺物等が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場等で活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助となることを期待します。

最後になりましたが、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関、地元の方々に心より厚くお礼申し上げます。

令和2年3月

宮崎県埋蔵文化財センター  
所長 山元高光

## 例 言

- 1 本書は、県道飯野松山都城線（都城志布志道路）金御岳工区道路改良工事に伴い、宮崎県教育委員会が実施した宮崎県都城市梅北町10792-2に所在する大浦遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、宮崎県県土整備部都城土木事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり宮崎県埋蔵文化財センターが平成30（2018）年7月9日から平成30年10月26日まで行った。
- 3 発掘調査は、高村哲、今塩屋毅行、永山鏡太郎が担当した。現地調査における図面作成および写真撮影は調査担当者が分担して行った。
- 4 調査に際しては、世界測地系に準拠した10mグリッドを設定した。この座標グリッドにアルファベットと整数で名称を与え、この区画を基準として遺構等の図化作業を行った。
- 5 整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行い、本書に係わる業務については、高村が整理作業員の補助を得て行った。
- 6 グリッド杭設置に伴う測量業務は株式会社旭総合コンサルタント、空中写真撮影は有限会社スカイサーベイ九州、石器実測は株式会社島田組にそれぞれ委託した。
- 7 本書で使用した第2図「大浦遺跡および周辺遺跡位置図」は国土地理院発行の電子地形図25000分の1『都城』『木古』をもとに作成した。
- 8 本書で使用した土層断面及び遺物の色調等は、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修『新版 標準土色帖』を参考にしたが、色調記号の記載がない場合はその限りではない。
- 9 本書中の図面の方位は、座標北（G.N.）を示している。標高は海拔絶対高である。また、全体図で使用した座標は世界測地系（WGS84）九州第Ⅱ系に準拠している。
- 10 本書は、第Ⅰ章～第Ⅲ章を高村、第Ⅳ章を高村・今塩屋が執筆し、全体の編集は、高村が今塩屋の補助を得て行った。
- 11 遺物の写真撮影は高村が行った。
- 12 石材の分類は、赤崎広志（宮崎県埋蔵文化財センター）、陶磁器の分類等は、谷口晴子（宮崎県埋蔵文化財センター）の監修のもと、高村が行った。
- 13 出土遺物・実測図・その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターにて保管している。
- 14 本書で使用した遺構略記号は以下のとおりである。

SA：竪穴建物跡	SB：掘立柱建物跡	SH：単独の小穴
SM：周溝墓	SC：土坑	Tr：トレンチ（調査坑）

# 本文目次

第Ⅰ章	はじめに	
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の組織	1
第3節	発掘調査の方法と経過	2
第4節	整理作業及び報告書作成、普及活動	3
第Ⅱ章	遺跡の立地と環境	
第1節	地理的環境	4
第2節	歴史的環境	4
第Ⅲ章	調査の成果	
第1節	調査成果の概要	7
第2節	基本層序	8
第3節	縄文時代早期の調査と出土遺物	10
第4節	縄文時代後期～晩期の遺構と出土遺物	12
第5節	弥生時代中期～後期の出土遺物	17
第6節	古代～中世の遺構と出土遺物	19
第Ⅳ章	総括	
第1節	縄文時代	43
第2節	弥生時代	43
第3節	古代から中世	44
第4節	おわりに	48

## 挿 図 目 次

第 1 図	大浦遺跡周辺の主要な遺跡分布図	5
第 2 図	遺構配置図 (縄文時代～中世)	7
第 3 図	調査区と周辺地図	8
第 4 図	土層断面図 (1)	9
第 5 図	縄文時代早期の調査箇所	10
第 6 図	縄文時代早期の遺物実測図	11
第 7 図	土層断面図 (2)	11
第 8 図	縄文時代遺構配置図	12
第 9 図	遺物包含層残存状況	12
第 10 図	SA1 実測図および出土遺物実測図	13
第 11 図	縄文時代の土器実測図	15
第 12 図	縄文時代の石器実測図 (1)	16
第 13 図	縄文時代の石器実測図 (2)	17
第 14 図	弥生時代の遺物実測図	18

第 15 図	古代～中世遺構配置図	19
第 16 図	掘立柱建物跡実測図 (1)	22
第 17 図	掘立柱建物跡実測図 (2)・SB4 出土遺物 実測図	23
第 18 図	掘立柱建物跡実測図 (3)	24
第 19 図	小穴群出土遺物実測図	25
第 20 図	1号周溝墓及び遺構内出土遺物実測図	27
第 21 図	土坑実測図 (1)	28
第 22 図	土坑実測図 (2) 及び出土遺物実測図	29
第 23 図	包含層出土遺物実測図 (1)	31
第 24 図	包含層出土遺物実測図 (2)	33
第 25 図	包含層出土遺物実測図 (3)	35
第 26 図	包含層出土遺物実測図 (4)	36
第 27 図	包含層出土遺物実測図 (5)	37
第 28 図	都城盆地における主な古代～中世周溝墓	47

## 図 版 目 次

図版 1	大浦遺跡遠景
図版 2	大浦遺跡調査区全景
図版 3	調査区北東側土層堆積状況、南東側土層堆積 状況、北西側土層堆積状況、XI層より下層の 土層堆積状況 (シラス層)
図版 4	SA1 検出状況・SA1 検出位置・SA1 土層堆積 状況・SA1 完掘状況
図版 5	掘立柱建物跡、土坑検出状況、SB1 完掘状況 SM1・SB2～SB5 完掘状況
図版 6	柱穴埋土 A・B、SC3 検出・半載状況、SC4・5 半載状況、土師器皿出土状況、作業風景
図版 7	SM1 墓壇検出・遺物出土状況・完掘状況
図版 8	縄文土器・石器・SA1 出土遺物
図版 9	弥生土器・石器、土師器杯、白磁碗、黒色土 器塊、SM1・SB4・小穴群・土坑出土遺物
図版 10	土師器杯、土師器高台付壇
図版 11	黒色土器塊、土師器皿、土師器甕・鉢
図版 12	土師器鉢、製塩土器・紡錘車、須恵質貯蔵具 滑石製石鍋、白磁・青磁、刀子、鉄器・鍛冶 関連遺物

## 表 目 次

第 1 表	竪穴建物跡 (SA) 一覧	38
第 2 表	掘立柱建物跡 (SB) 一覧	38
第 3 表	周溝墓 (SM) 一覧	38
第 4 表	土坑 (SC) 一覧	38
第 5 表	土器観察表	39
第 6 表	土器観察表	40
第 7 表	土器観察表	41
第 8 表	製塩土器・土製品観察表	42
第 9 表	陶磁器観察表	42
第 10 表	石器・石製品計測表	42
第 11 表	鉄器計測表	42
第 12 表	宮崎県内で確認された古代～中世周溝墓一覧	46

## 本 文 写 真 目 次

写真 1	発掘作業員向け現地説明会	3
写真 2	遺跡発掘速報会	3

## 第I章 はじめに

### 第1節 調査に至る経緯

地域高規格道路「都城志布志道路」は、宮崎県都城市を起点に鹿児島県曽於市を經由して志布志市に至る、総延長約44kmの自動車専用道路である。この道路は、都城・大隅定住自立圏の地域振興や以下の3つの機能強化

- ① 「防災対策機能の強化」人的・物的支援を行うために、太平洋沿岸地域・志布志港と後方支援都市である都城市を結ぶ。
- ② 「経済対策機能の強化」六次産業化の推進、輸送コストの縮減や飼料の安定供給による農林畜産業の活性化、企業誘致や新たな雇用創出などに大きく寄与し、本地域の経済発展に資する。
- ③ 「医療対策機能の強化」主要な救急医療施設を高速道路網で結ぶ。

を図るため、九州縦貫自動車道宮崎線（都城I.C）と東九州自動車道（志布志I.C）および物流拠点である中核国際港湾の志布志港を結ぶ路線であり、平成6年12月に計画路線に指定された。

都城志布志道路のうち、宮崎県側では約22kmが工事施工区間であり、その路線構成は都城I.C－五十町I.C間（約13.4km）が一般国道10号都城道路（国土交通省事業）、五十町I.C－県境（約8.5km）が県道12号都城東環状線および県道109号飯野松山都城線のバイパス（県事業）である。

当該路線内の埋蔵文化財については、25遺跡393,700㎡の存在が把握されており、平成9年度以降宮崎県教育庁文化財課による試掘・確認調査の結果をもとに、工事計画と遺跡の保護に関する協議調整が重ねられている。

今回発掘調査を実施した大浦遺跡は、金御岳I.C－県境区間（金御岳工区）内に位置する。同工区では計5箇所の遺跡が把握されており、その他、嫁坂遺跡（平成28～29年度）、保木島遺跡（平成27・29～30年度）、上高遺跡（平成29～30年度）、小迫遺跡（平成30年度）の発掘調査が行われている。なお、区間終点部の小迫遺跡は、当遺跡の約150m南の谷「仙人谷」を挟んだ位置にある。

大浦遺跡では平成29年度実施の確認調査結果をもとに、遺跡の取り扱いに関する協議を進めた結果、遺構や遺物の存在が確認された1,600㎡の範囲については、現状保存が困難であることから、やむを得ず記録保存の措置を講ずることになった。これを受けて、平成29年3月、県道飯野松山都城線（金御岳工区）地域連携推進事業の一環として県都城土木事務所より発掘調査の依頼がなされ、平成30年7月、県埋蔵文化財センターを調査機関とする発掘調査の着手へと至ったものである。

### 第2節 調査の組織

大浦遺跡の発掘調査・整理作業および報告書作成に伴う体制は次の通りである。

調査主体：宮崎県教育委員会

事業調整：宮崎県教育庁文化財課

平成30・31年度	埋蔵文化財担当リーダー	主幹	飯田 博之
平成30年度	埋蔵文化財担当	主査	松本 茂
令和元年度（平成31年度）	埋蔵文化財担当	主査	藤木 聡

発掘調査・整理作業及び報告書作成 : 宮崎県埋蔵文化財センター

平成30年度 発掘調査

所長		長峯 勝志
副所長兼総務課長		田中 礼子
総務課総務担当リーダー	副主幹	寺原真由美
調査課長		吉本 正典
調査課調査第一担当リーダー	主 幹	松林 豊樹
調査課調査第一担当 主査		高村 哲 (調査担当)
調査課調査第一担当 主査		今塩屋毅行 (調査担当)
調査課調査第一担当 調査員		永山鏡太郎

令和元年度 (平成31年度) 整理・報告書作成

所長		山元 高光
副所長兼総務課長		内野真由美
総務課総務担当リーダー	主 幹	寺原真由美
調査課長		赤崎 広志
調査課調査第一担当リーダー	副主幹	和田 理啓
調査課調査第一担当 主査		高村 哲 (整理作業・報告書作成担当)
調査課調査第一担当 主査		今塩屋毅行

### 第3節 発掘調査の方法と経過

大浦遺跡の発掘調査は、平成30(2018)年7月9日～平成30年10月26日まで実施した。着手当初の調査対象範囲(1,600㎡)は、排土置き場の関係上、便宜的に北側(900㎡)と南側(700㎡)の2調査区に区分し調査を行った。なお、本報告書では、2調査区を統合して事実記載を行っているが、調査経過の関係上、調査区北側と調査区南側の表記箇所がある。

以下、時系列に沿って主な調査の経過を下記に示す。なお、基本層序については、第III章第2節を参照されたい。

平成30年7.9～13	調査区 北側	調査区北側、重機による表土除去他
7.17～8.10		遺物包含層(古代～中世)掘削、実測、記録作成
8.16～30		古代～中世の遺構検出、遺構掘削及び実測
9.3～5	調査区 南側	重機・人力掘削による縄文時代早期の確認 XI層上面までの確認調査を実施したが遺構・遺物はなし
9.5～6		調査区南側、重機による表土除去他
9.10～20		遺物包含層(縄文時代・弥生時代)掘削、実測、記録作成
9.25～10.19		縄文時代後期・晩期の遺構検出、遺構掘削及び実測
10.22～25		重機・人力掘削による縄文時代早期の確認 XI層上面までの確認調査をした結果、遺構はないが、2点の遺物確認
10.26		調査終了



## グリッドの設定

調査対象地域全域に対して、国土地産標（世界地系）に基づいた10m×10mのグリッドを設定し、南北方向のグリッド線に数字、東西方向のグリッド線にアルファベットを付与して、グリッドの北西隅の交点を各々のグリッド名とした。（第2・3図参照）

## 遺構掘削

遺構掘削については、検出状況から個別に任意の主軸を設定し、半截により埋土状況を確認しながら掘削することを基本とした。堅穴建物跡や土坑については先行トレンチを掘削し、床面の認定や埋土の堆積状況を確認したうえで掘削を進めるものもあった。

## 作図記録

遺構の作図に関しては、縮尺1/10もしくは1/20での個別図作成を基本とし、平面図については（株）CUBIC製の「遺構くん」で実測、作図・記録したが、堅穴建物跡、周溝墓等の土層図および遺物出土状況図については、調査員が実測、作図を行った。

## 写真記録

デジタルカメラ（35mmフィルムカメラ相当）を使用した。さらに、業者委託による空中写真撮影を調査区のⅦa層上面（完掘状況）・周辺地形等について実施した。

## 遺構番号

遺構を検出した順に遺構名と番号を付した。ただし、土坑（SC）については、遺構の形態や埋土の状況といった調査時の所見や報告書作成の段階での検討により、攪乱や樹根等と判明したものであるため、本報告書では、遺構と最終的に判断されたものについてのみ報告する。

## 第4節 整理作業及び報告書作成、普及活動

出土遺物及び図面・写真などの記録類は、調査終了時に宮崎県埋蔵文化財センター本館へ搬入し、平成30年11月1日より出土遺物の洗浄・注記作業を開始した。出土遺物のうち153点を実測・図化し、写真撮影を行った。報告書刊行に係る製図及び執筆編集作業のすべてを令和2年1月までに完了させ、同年2月に印刷・製本作業を行った。

普及活動の一環として、発掘現場では作業員向けの現地説明会を複数回、一般向けとしては宮崎県立図書館特別展示室を会場とした「遺跡発掘速報展2019」（令和元年8月31日から9月23日）での成果展示、同館で開催された遺跡発掘速報会（9月1日）で成果報告を行った。



写真1 発掘作業員向け現地説明会（2018年夏）



写真2 遺跡発掘速報会（2019年9月）

## 第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

### 第1節 地理的環境

大浦遺跡は宮崎県都城市に所在する。都城市は、宮崎県南西部に位置し、主に畜産業が盛んな人口約17万人を擁する県下第2位の都市である。大浦遺跡は、都城市の中心市街地から約13km南の鹿児島県曾於市との県境付近にあり、まさに都城盆地の南縁に位置する。都城盆地は、北東部の諸県丘陵、南東部の鰐塚山系、北西部の霧島山系に囲まれ、南北約33km、東西約13km、面積約760km<sup>2</sup>、北東から南西を長軸にした楕円形をなしている。

調査地点付近の北東には金御岳（標高472m）および支峰の天ヶ峰（標高354m）がそびえ、これらの山頂から派生した開析谷がいくつも南東方向に延びており、仙人谷、川原谷、宇都谷といった地名が点在している。調査地点は、天ヶ峰山麓に広がる台地の南側緩斜面にあり、幅狭な谷（仙人谷）に面している。

### 第2節 歴史的環境

本遺跡が所在する都城盆地域は、たび重なる降下火山灰の影響のためか、各時代の遺跡調査事例の多寡が著しい状況ではあるが、大浦遺跡周辺の発掘調査成果について概略を以下に述べる。

#### <旧石器時代>

都城地域で確認されている遺跡は少ない。大浦遺跡周辺では、大岩田上村遺跡にて細石刃石器群、中床丸遺跡・大年遺跡（梅北町）において、桜島薩摩テフラ下位より剥片が出土している。

#### <縄文時代>

草創期の遺跡は、竪穴状遺構や炉穴、集石、配石遺構などが検出され、隆帯土器期の集落と考えられる王子山遺跡（山之口町）、それに類似する土器が出土した川原谷出水遺跡がある。また、笹ヶ崎遺跡では、桜島薩摩テフラを含む層の下部から集石遺構が検出されている。

早期の遺跡は、梅北佐土原遺跡、笹ヶ崎遺跡、中床丸遺跡、高樋遺跡において、集石遺構が検出されている。梅北佐土原遺跡では石畿のみ、笹ヶ崎遺跡では押型土器、中床丸遺跡では前平式・桑ノ丸式土器、高樋遺跡では加栗山式・下剥峰式土器などが出土している。

前期～中期の遺跡は、鬼界アカホヤ火山灰の影響によるものか、遺跡数は少ないが、笹ヶ崎遺跡で、轟B式・曾畑式系・深浦式・船元式系土器が比較的多数出土している。

後期～晩期の遺跡としては、野添遺跡にて後期の竪穴建物跡、大岩田村ノ前遺跡では、小穴が楕円形上に巡る竪穴状遺構が検出されている。高樋遺跡においては、黒川式の深鉢や浅鉢、組織痕土器が確認されている。また、大浦遺跡の北側に位置する塚坂遺跡では、竪穴建物跡と土坑で構成される集落跡が検出された。後期末頃に比定される中岳Ⅱ式土器、後期前葉頃の宮之迫式土器、晩期初頭頃の入佐式深鉢、後期末頃に比定される御領式深鉢などが多数出土している。

#### <弥生時代>

都城盆地は、全国的にも早い時期の水田稲作の存在が確認された地域である。坂元A遺跡では水



国土地理院地形図

- |                  |          |             |                  |
|------------------|----------|-------------|------------------|
| 1 大浦遺跡 (県調査)     | 2 小迫遺跡   | 3 上高遺跡      | 4 嫁坂遺跡 (2019年調査) |
| 5 嫁坂遺跡 (2001年調査) | 6 保木島遺跡  | 7 中床丸遺跡     | 8 大年遺跡           |
| 9 笹ヶ崎遺跡          | 10 高樋遺跡  | 11 梅北針谷遺跡   | 12 筆無遺跡          |
| 13 働女木遺跡         | 14 平峰遺跡  | 15 今町一里塚    | 16 上針谷・下針谷遺跡     |
| 17 大岩田上村遺跡       | 18 黒土遺跡  | 19 大岩田前ノ村遺跡 | 20 尾崎第一遺跡        |
| 21 王子原遺跡         | 22 上安久遺跡 | 23 川原谷出水遺跡  | 24 大浦遺跡 (都城市調査)  |

・遺跡名記入箇所は、都城志布志道路建設関連に伴って発掘調査を行った遺跡

第1図 大浦遺跡周辺の主要な遺跡分布図

田跡、黒土遺跡では擦り切り孔を有する石包丁や靱圧痕を有する土器片などが出土している。

大年遺跡からは、刻目突帯文土器や表面に赤色顔料を塗布した壺の破片が出土しており、後期後半から古墳時代初頃の集落も確認されている。

集落跡としては、筆無遺跡や働女木遺跡があげられ、中期後半以降の集落が多く見られる。

大浦遺跡でも今回の調査地から約800m北東の地点にて、中期後半頃の竪穴建物跡が調査されている（都城市調査）。出土土器には、宮崎平野部や大隅半島方面との交流を色濃く反映している。

#### <古墳時代>

野添遺跡で、前期～中期の竪穴建物跡や土坑墓、豊満大谷遺跡で、中期の竪穴建物跡がそれぞれ検出されている。平峰遺跡では、中期～後期の大規模な集落が見つかるとともに、鍛冶関連の遺物も出土している。大年遺跡からは、間仕切り付き建物跡を含む竪穴建物跡が多数検出されている。

#### <古代～中世>

筆無遺跡では、掘立柱建物跡、周溝墓、土坑墓などが確認されている。また、遺物としては、墨書土器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、貿易陶磁器、石帯、小型滑石製石鍋などが出土している。笹ヶ崎遺跡では、掘立柱建物跡や犬走状遺構に伴い、堀切や土塁といった防衛用施設も確認され、遺跡周辺が地域有力層の居館跡であるとともに、何らかの公的機関を形成していた可能性も考えられる。大年遺跡では、道路状遺構や溝状遺構が多く検出されており、詳細な性格は不明であるが、長期間にわたって利用されていた状況が判明している。また、線坂遺跡では水田跡、坂ノ下遺跡では中世の畠跡が検出されている。

#### <近世>

大浦遺跡周辺には、寺院などの宗教施設が存在していたようであるが、現存するものは少ない。尾崎第一遺跡（貴船寺跡）において中世末から近世に及ぶ土坑墓が143基検出されている。また、近世の道標である今町一里塚があり、国の史跡に指定されている。

#### 引用・参考文献

- |              |  |
|--------------|--|
| 都城市史編さん委員会   | 2006『都城市史 資料編 考古』都城市                     |
| 都城市教育委員会     | 1997『大浦遺跡』都城市文化財調査報告書第37集                |
| 都城市教育委員会     | 2011『水田藤束遺跡』都城市文化財調査報告書第102集             |
| 都城市教育委員会     | 2012『王子原遺跡（第4次調査）』都城市文化財調査報告書第106集       |
| 宮崎県埋蔵文化財センター | 2002『線坂遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第63集        |
| 宮崎県埋蔵文化財センター | 2004『豊満大谷遺跡・野添遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第83集 |
| 宮崎県埋蔵文化財センター | 2008『筆無遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第166集       |
| 宮崎県埋蔵文化財センター | 2008『大島島田遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第178集     |
| 宮崎県埋蔵文化財センター | 2016『大年遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第237集       |
| 宮崎県埋蔵文化財センター | 2016『笹ヶ崎遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第240集      |
| 宮崎県埋蔵文化財センター | 2018『高樋遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第243集       |
| 宮崎県埋蔵文化財センター | 2019『線坂遺跡Ⅱ』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第249集      |

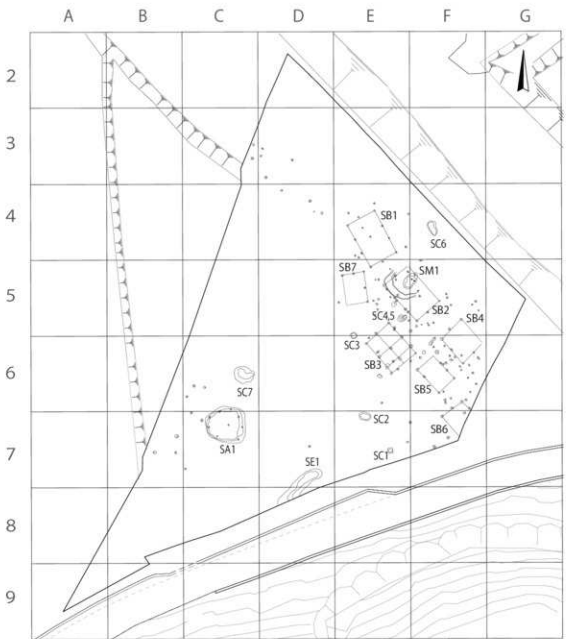
### 第三章 調査の成果

#### 第1節 調査成果の概要

大浦遺跡においては、以下の調査成果を得ることができた。

調査区南側のⅧ層以下の縄文時代早期面では、遺構は検出されず縄文土器数点のみの出土であった。Ⅶa層の縄文時代後期～晩期面では、竪穴建物跡1基が検出された。また、同時期に比定される遺物が出土した。弥生時代に関しては、遺構は検出されず、遺物のみの出土であった。古代から中世に属すると考えられる遺構は、掘立柱建物跡7棟、周溝墓1基、土坑7基や小穴群などである。

Ⅶa層上面にて検出されたこれらの遺構は調査区の北東部を中心に分布し、南半部は遺構密度が低くなる状況である。なお、時期不明の遺構として溝状遺構が1条、さらに、表土中からは近世の遺物が数点出土した。



第2図 遺構配置図 (縄文時代～中世 S=1/500)

## 第2節 基本層序

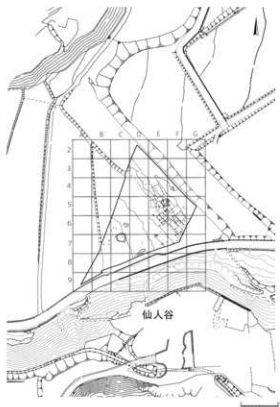
調査区内の基本層序は次の通りである。

I層	表土	
II層	造成土	VII層～VIII層のブロック土を密に含み固く締まる
III層	灰褐色土 (Hue7.5YR4/2)	造成土に黄白色・白色軽石を含む
IV層	黒褐色土 (Hue10YR2/2)	に桜島文明軽石 (Sz-3、AD1471) を含む
V層	黒褐色土 (Hue10YR3/2)	に黄白色・白色軽石を含む
VI層	黒色粘質土 (Hue10YR3/4)	—— 遺物包含層 (古代～中世) 北側のみ ——
VIIa層	褐色土 (VIIb層の土壌化した層)	—— 遺物包含層 (縄文・弥生) 南側のみ ——
VIIb層	霧島御池軽石 (Kr-M、約4,600年前)	
VIII層	鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah、約7,300年前)	
IX層	霧島牛のスネ火山灰 (Kr-US、約7,600年前)	—— 縄文時代早期の遺物包含層 ——
X層	黒褐色土 (Hue7.5YR3/3)	に桜島11テフラ (Sz-11、約8,000年前) を30%程含む
XI層	黒色粘質土 (Hue7.5YR2/1)	
XII層	褐灰色土 (Hue10YR6/1)	に桜島薩摩テフラ (Sz-S、約12,800年前) を10%程含む
XIII層	褐色土 (Hue7.5YR4/4)	小さい黄白色・白色軽石を含み、粘性なし
XIV層	褐色土 (Hue7.5YR4/4)	数mm～2cm程のボラや最大10cm程の軽石が入り、粘性なし
XV層	にぶい橙色土 (Hue7.5YR6/4)	大きい黄白色・白色軽石を含み、粘性なし
XVI層	橙色土 (Hue7.5YR7/6)	2cm程の黄橙色ボラは入るがXIV層の軽石は含まず、粘性なし

調査地は、鰐塚山系天ヶ峰 (354 m) の南東裾部に形成された標高約195 mのシラス台地に位置する。調査区北側の北側部分は表土を除去するとX層の桜島11テフラがあらわれる部分が多い。これは、現代の畑地造成に伴い約5 mの地山が削平された結果であり、旧地形が大きく改変されたことが分かる。

調査区中央部には、1 mほどの地山が削平されており、その部分においても大きな造成が行われたことが分かる。調査区南側においても0.5 mほどの地山掘削がみられる。そのため調査区は大きく3段に分けられ、高低差は約2.5 mある。なお調査区東側には、道路を挟んで、開析谷 (地元の地名では「仙人谷」) があり、全体的に南東側に傾斜が下がっている傾向が強くみられる。

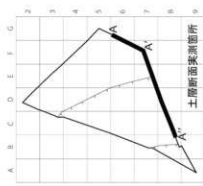
このような傾斜地や擾乱の影響であろうか遺物包含層の残存状況は調査区北側と南側で違いがあった。調査区南側のVII a層において、縄文時代から弥生時代の遺物包含層が残存していた。この層は調査区北側では検出されなかった。また、調査区北側の南東部分のVI層において古代から中世の遺物包含層が残存した。この層は調査区南側においては、検出されなかった。



第3図 調査区と周辺地図 (S=1/2000)



- |        |                                |   |
|--------|--------------------------------|---|
| 土層     | 表土                             | SE1 (凍結遺構) 埋土                           |
| II 層   | 凍成土 (凍層～凍層のブロック土を型に含み種く結まる)    | 1 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 1～2mmの黒褐色バミス3%程度含む  |
| III 層  | 凍成土 (Hue7.5YR4/2) に黄白色・白色粒石を含む | 2 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 粘性あり しまりや強い         |
| IV 層   | 黒褐色土 (Hue10YR2/2) に棕褐色文明粒石を含む  | 3 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 1～2mmの暗褐色バミス7%程度含む  |
| V 層    | 黒褐色土 (Hue10YR3/2) に黄白色・白色粒石を含む | 4 暗褐色土 (Hue10YR3/4) 粘性あり しまりや強い         |
| VI 層   | 黒色粘質土 (Hue10YR3/4)             | 5 暗褐色土 (Hue10YR3/4) 1～2mmの暗褐色バミス10%程度含む |
| VII 層  | 埋土土 凍成層の土凍化した層                 | 6 褐色土 (Hue10YR4/4) 粘性あり ややしまりあり         |
| VIII 層 | 湖沼砂粘石 (R=4, 約4,600年前)          | 7 褐色土 (Hue10YR4/4) 1～2mmの黒褐色バミス15%程度含む  |
| IX 層   | 荒井アカボヤ火山灰 (R=6, 約7,300年前)      |   |
|        | 湖沼牛のすね火山灰 (R=US, 約7,600年前)     |   |



第4図 土層断面図(1) (S=1/100)

### 第3節 縄文時代早期の調査と出土遺物

#### 1 概要

確認調査による7箇所（試掘Tr1～7）の調査結果をもとに、本調査では7箇所（A～F地点）にて、Ⅷ層（K-Ah）を除去し、Ⅸ層（霧島牛のすね火山灰）X層（黒褐色土に板島11テフラ堆積土）を検出し、縄文時代早期と想定される面の調査を行った。各地点の状況は下記のとおりである。

A地点：第7図（B～B'）の土層断面図に示してある通り、後世の畑造成のため水平に削平され

1層の表土直下はX層堆積となる。以下、Ⅺ層まで掘り下げたが遺構、遺物はなかった。

B地点：遺構、遺物の検出はなかった。

C地点：遺物はなく、鬼界アカホヤ火山灰降灰後の風倒木を確認したのみであった。

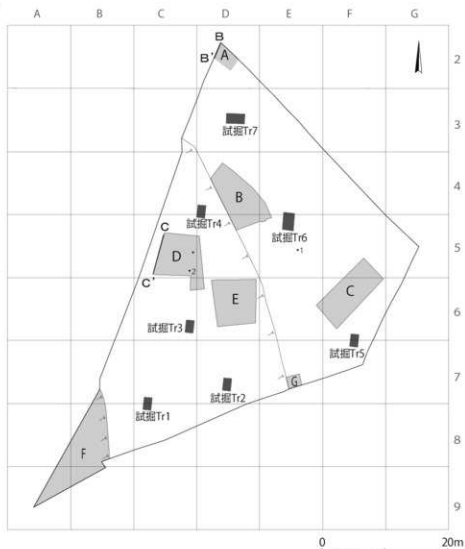
D地点：遺構の検出はされなかったが、Ⅸ層より縄文時代早期の土器が2点出土した。土器出土地点を中心に2m四方拡張したものの、その他の遺構、遺物の検出はなかった。

E地点：遺構、遺物の検出はなかった。

F地点：後世の畑地造成によって、一段下げられて耕作されていることもあり、遺構、遺物の検出はなかった。

このように確認調査時、本調査時を含めて、調査区の約10%の面積について、Ⅷ層からX層の掘り下げを実施したが、遺構の存在は確認されず、遺物はD地点にて、縄文土器が2点のみ出土しただけである。焼礫や炭化物等の包含も認められなかった。

確認調査及び本調査における土層堆積状況から鑑みると、縄文時代早期頃のD・E地点周辺は、A～C地点並びにF地点から傾斜する谷地形と復元され、D地点で出土した縄文早期の土器片は、他所（高所）からの2次的移動によるものと考えられる。



第5図 縄文時代早期の調査箇所 (S=1/600)

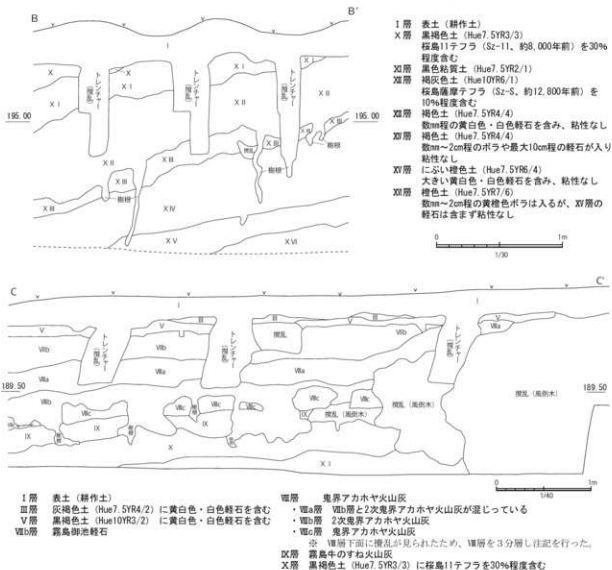


## 2 遺物 (第6図)

縄文時代早期に属する遺物は縄文土器3点である。E5グリッドVI層からの1点(掲載番号1)とD地点IX層より2点(掲載番号2と縄文土器深鉢胴部片であるが小破化が著しいため未図化1点)である。1は古代～中世の包含層(VI層)より、出土した土器片であるが、形態的特徴により縄文時代早期の土器と判断されるため、この項にて報告する。円筒形土器の深鉢口縁部で、その端部は丸くまとまる。内外面ともにナデ調整である。2は妙見式または天道ヶ尾式土器の深鉢口縁部である。縄文地文で、細めの突帯を矩形に数条めぐらす。口縁端部および突帯上は縄文施文であり、口縁端部は面をなし、外傾する。



第6図 縄文時代早期の遺物実測図 (S=1/2)



第7図 土層断面図(2) (B~B' S=1/30、C~C' S=1/40)

#### 第4節 縄文時代後期～晩期の遺構と出土遺物

遺構はⅦb層上面において、縄文時代後期に属する竪穴建物跡1軒が検出された。また、調査区西半分のⅦa層（第9図）や東半分のⅥ層から後期～晩期の土器と石器が出土した。なお、東半分のⅦa層は無遺物層であった。

##### 1 遺構

###### (1) 竪穴建物跡（SA1、第10図）

**位置** 調査区南側のC7グリッドにあり、Ⅶb層上面で検出された。

**規模等** 遺構の規模は約4.6m×4.2m、長方形プランである。東側辺が直線的である。その辺を底辺と捉えた場合の主軸に対して、西に約90°振れている。床面積は約14.3㎡あり、遺構の断面形は、壁面の立ち上がりの緩い皿状となる。

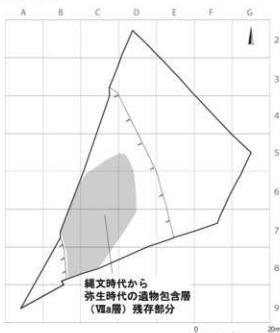
**埋土** 遺構の埋土は、褐色土で、白色粒、黄橙色粒が多く混じるが、風倒木やトレンチャー痕で攪乱されている状況も見られた。

**床面及び柱穴** 床面は、検出面から約0.3mの深さでほぼ水平にⅦ層を掘削したのち、褐色土にて均一に約0.1mの層厚で埋め戻して貼り床とする（第10図土層断面図4）。炬跡や建物内土坑の存在は認められなかった。竪穴部内では攪乱を受けた南側を除く9箇所の小穴が貼り床面に検出されたが、P1を主柱穴とした場合、P1と床面外縁に沿う小穴列（P2～P9）との芯々距離は、1.62m～2.35mで、小穴の掘り込みはP1側に向けて傾くことから求心的な配置となる。また小穴群の芯々距離は1.21m～1.52mの間でほぼ等間隔に配置され、それらの深さは約0.22m～0.41mである。

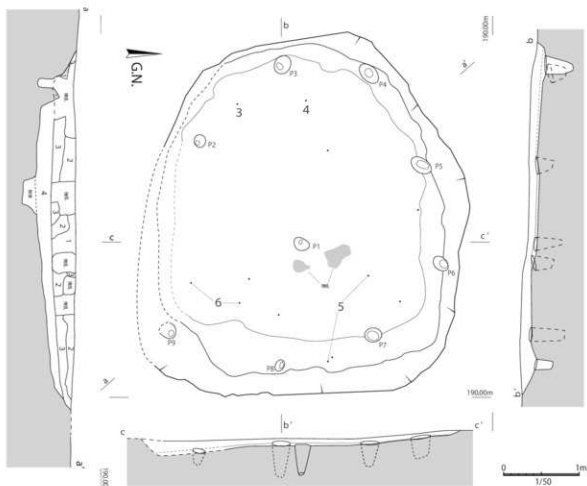
**出土遺物**（第10図）遺物はすべて縄文土器で、床面付近から出土している。3から6は、縄文土器の深縁の口縁部から胴部の破片資料である。これらは、胎土や調整、形態の特徴から中岳Ⅱ式土器に位置づけられると考えられるが、破片資料であるため、全体のプロポーションは不明確である。3と4の口縁部は、断面三角形形状であり、沈線と刺突文が施されている。5は肥厚した口縁部に2条の沈線を巡らせており、内面は、横方向の条痕後、粗いミガキが施されている。一部に黒斑がみられる。6は胴部の破片である。胴部最大径にあたる部分のやや上位に2条の沈線をめぐらす。内外面ともに横方向のミガキが施されている。



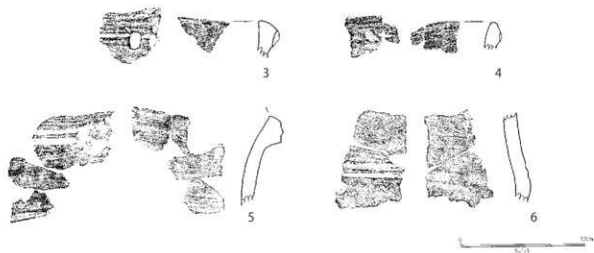
第8図 縄文時代遺構配置図（S=1/1000）



第9図 遺物包含層残存状況（S=1/1000）



1. 黒褐色土 (Hue10YR3/2) しまり、粘性ともになし。1mm~2mm程の白色粒、黄褐色粒 (Kr-M) が混じる。  
 2. 褐色土 (Hue10YR4/4) しまり若干あり。粘性なし。1mm~2mm程の白色粒、黄褐色粒 (Kr-M) が多く混じる。  
 3. 褐色土 (Hue10YR4/6) しまり若干あり。粘性なし。1mm~2mm程の白色粒、黄褐色粒 (Kr-M) が多く混じる。所々、樹根等の影響か、2の土が混じる部分がある。  
 4. 褐色土 (Hue10YR4/6) しまり若干あり。粘性なし。1mm~2mm程の白色粒、黄褐色粒 (Kr-M) が多く混じる。Ⅶ層 (K-Ah) がブロック状に混じる。張り床として、埋め戻された土と考えられる。



第10図 SA1実測図 (S=1/50) および出土遺物実測図 (S=1/3)

## 2 遺物

ここでは、縄文時代後期～晩期に属すると考えられる土器や石器を一括して掲載する。8～11、15～18、20・21、23～27、31～33、42・43は縄文時代後期～晩期の遺物包含層（VIIa層）の出土資料であり、その他は古代～中世の遺物包含層（VI層）や遺構出土資料である。

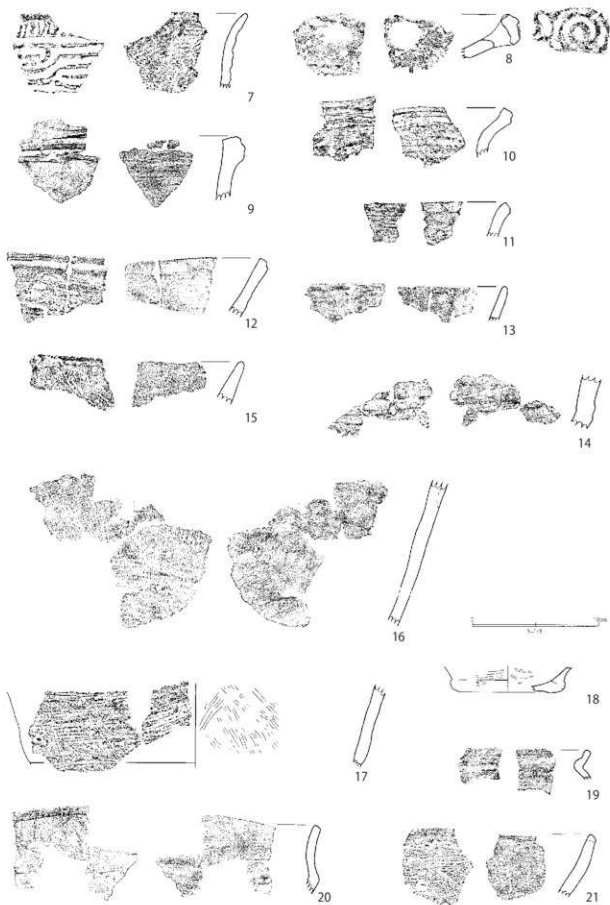
### (1) 土器（第11図）

7は深鉢口縁部である。外側に短く開き、貝殻刺突文より下位は、ための沈線を巡らせる施文である。宮之迫土器の一種と考えられる。8は台付皿の口縁部で焼成前穿孔がある。口縁端部は、刺突文、沈線により同心円状の文様をなす。9～18は、深鉢の口縁部・胴部の破片資料である。9・10の口縁部は肥厚していて、沈線文を施し、9は内外面に黒斑が見られる。11の口縁部は、面をなし、やや外に開く。13・15の口縁端部は丸くまとめており、15にはススが附着している。14は内外面ともに、横方向のミガキ調整が施されている。18は深鉢の底部としたが、ミガキがあることと器厚が薄いことから浅鉢底部の可能性もある。9～12は形態的特徴から中岳式土器、13・15は黒川式土器に属すると考えられる。19～21は、浅鉢の口縁部・胴部の破片資料である。ミガキ調整の精製土器（19・20）と条痕調整の粗製土器（21）に大別される。19の口縁部は短く屈曲し、口縁端部を丸くおさめる。20の口縁部は比較的長く、口縁部と胴部の境目はわずかに屈曲する。21の口縁端部はやや尖り気味で、条痕調整が施され、なお19～21は形態的特徴から黒川式土器でも新段階に相当すると考えられる。

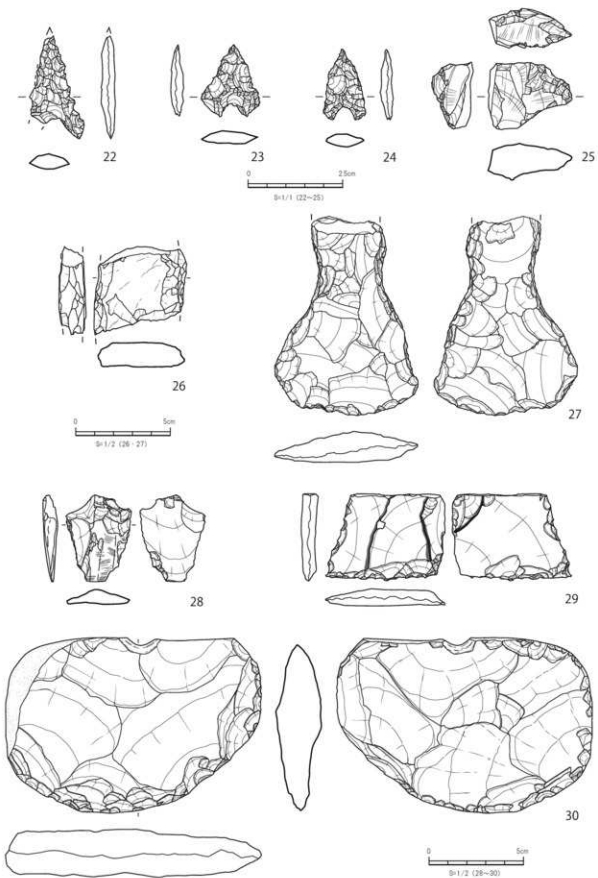
### (2) 石器（第12・13図）

剥片石器として、打製石鏃・剥片・打製石斧・スクレーパー、礮塊石器は、敲石・砥石・台石・礮石器・石錐が出土しており、図化に堪えられるもの12点を図化掲載した。

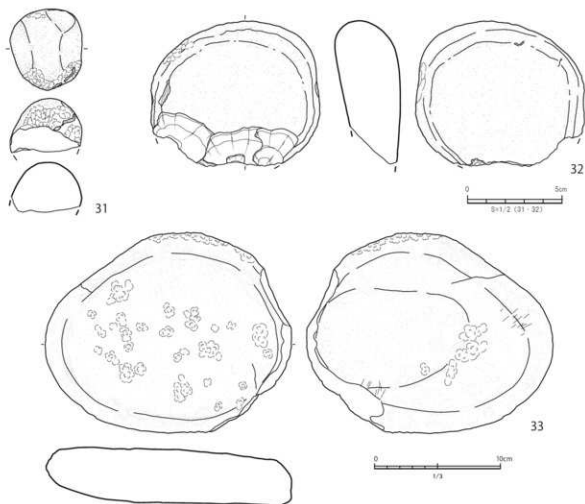
打製石鏃は5点出土し、3点を図化した。22・23は腰岳産黒曜石で、22は縦長の二等辺三角形の鏃身にU字状の抉りを有する基部がつく。23は完存品で、正三角形の鏃身に、U字状の抉りを有する基部がつく。24は、ガラス質安山岩製で、先端部が鋭く尖る二等辺三角形の鏃身にU字状の抉りを持つ基部がつく。25は、緑色頁岩製の2次加工剥片である。主剥離面の周縁に微細な剥離調整を施す。26・27はホルンフェルス（頁岩源）製の打製石斧である。26は上下を欠損しているが、本来は短冊形であった可能性が高い。27は基部を一部欠損するが、刃部は大きくバチ形に開く。いわゆる土堀り具の一種と考えられ、小型品の割には重量感がある。28～30はスクレーパーで、石斧のリダクションに伴う剥片の再利用品である可能性がある。28・29は頁岩製、30は砂岩製である。28は表面に残る擦痕が確認でき、両側縁は微細な剥離により、刃部を形成している。29は左側縁と下縁を刃部とし、両面から剥離が施されている。30は大型品である。一部自然面を残す調整剥離のあと、同縁の両面に剥離を施して刃部とする。なお、上縁の中央をさらに打撃して抉りをなす。31は砂岩を石材とする敲石である。親指と人差し指で固定可能な小型品である。32は砂岩製の礮石器である。円礮の端部を片刃の刃部とする。なお、礮面に敲打痕や擦痕が認められることから敲石または擦石からの転用品の可能性もある。33は砂岩製の台石である。扁平かつ平面的な台石で、安定性も高い。表裏面ともに、敲打痕が顕著で、側縁には被熱痕が認められる。



第11図 縄文時代の土器実測図 (S=1/3)



第12図 縄文時代の石器実測図(1) (S=1/1、S=1/2)



第13図 縄文時代の石器実測図(2) (S=1/2、1/3)

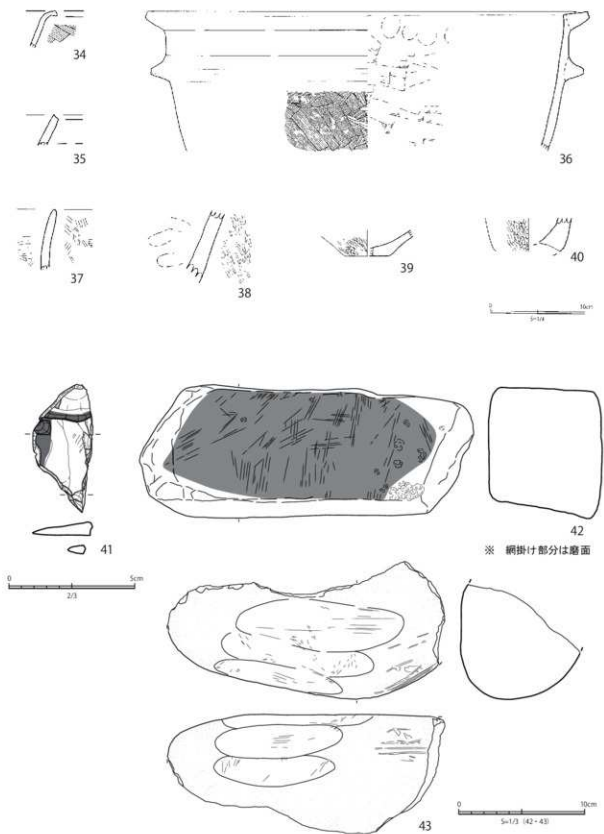
#### 第5節 弥生時代中期～後期の出土遺物

弥生時代の遺構は確認されなかったが、遺物は、調査区南側のⅦa層の褐色土(霧島御池軽石の土壌化した層)を中心に出土した。

34～36は甕である。34の口縁部は水平に屈曲する。35は「く」の字状に屈曲する口縁部とみられるが、その端部は面取りされる。36は口径約46.2cm大型品で、断面三角形の貼付口縁の直下には、太い突帯が一条つく。

37～39は甕である。37の口縁部はやや垂直に立ち上がり、その端部は丸く収める。38は底部に近い位置にある胴部片であろう。39は甕の底部で、底径は約4.5cmと推定される。40は鉢の底部付近であり、底部そのものは接合面にて失っている。

41～43は石器である。41は頁岩製の石錐で、剥片の下端を剥離調整して切先とする。上縁や左側縁に残る擦痕(刃部)から石庖丁の転用品である可能性もある。42・43は砂岩製の砥石である。42は直方体を呈し、重量4,300gと重い。使用面は金属器による擦痕が明瞭に残り、裏面の一部に鉄分の付着もある。43は半分以上欠損しているものの、使用面が4面ある。正面と側面部には、金属器による線状痕が数条認められる。なお、欠損面に沿って剥離が連続することから、石器石材の母岩として打割された可能性が考えられる。



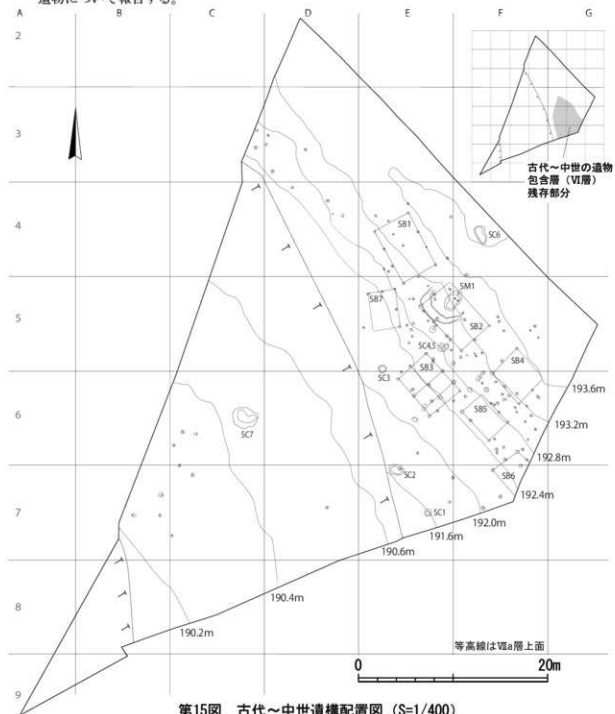
第14図 弥生時代の遺物実測図 (S=1/4、S=2/3、S=1/3)



## 第6節 古代～中世の遺構と出土遺物

### 1 概要

古代から中世に属すると考えられる遺構は、掘立柱建物跡7棟、周溝墓1基、土坑7基や小穴群などである。VIIa層上面にて検出されたこれらの遺構は、調査区の北～東半部（標高191.6～193.6m）を中心に分布し、西～南半部（標高190.2～190.6m）は、遺構密度が低い状況である。これは、西～南半部側は後世の畑地造成により大きく削平されたためであり、本来は調査区全体に遺構が分布していた可能性がある。遺物包含層（VI層）は標高191.4～192.4m付近を中心に層厚約0.15m程度堆積しており、古代から中世（9～14世紀）の遺物が出土した。よって、この周辺は南側の谷（仙人谷）に通じる浅い谷ないし窪地であったと考えられる。以下、個々の遺構や遺物について報告する。



第15図 古代～中世遺構配置図 (S=1/400)

## 2 遺構

### (1) 掘立柱建物跡

VII a 層上面で検出された小穴群のうち、掘立柱建物跡として現地復元および図上復元したのは7棟（1号～7号掘立柱建物跡）である。これらの掘立柱建物跡は標高192.4m～193.6mの限られた範囲の中で建物主軸（桁行方向）を等高線に平行するように重なり合うことなく整然と並ぶ配置である。

その構成は、総柱建物が1棟（SB3：2間×2間）と側柱建物（SB1～SB2、SB4～SB7：2間×2間、2間×3間が主体）であり、身舎規模からみるとSB1とSB2（面積約25㎡）とSB3（面積約21㎡）、SB4（面積約15㎡）、SB4より小さい建物SB5～SB7と階梯的となる。また、柱穴間距離は、1.9m±0.3mを基本とするようであり、SB5やSB7の場合は1.5m前後となる。

柱穴埋土は、埋土A（黒褐色土：黒色粘質土混）と埋土B（黒褐色土：霧島御池軽石の少量混入）に区別される。また、すべての柱穴において根固め等はいられず、柱痕跡も確認できなかった。

掘立柱建物跡の時期や変遷については、第四章にて検討するが、柱穴埋土には桜島文明軽石（Sz-3）が含まれないこと、柱穴出土遺物や柱穴を掘り込む遺物包含層（VI層）の出土遺物から考えると、掘立柱建物跡は12～13世紀を中心とするものとみられる。

#### 1号掘立柱建物跡（SB1、第15・16図）

**位置** E4・E5グリッドで検出された。主軸方向N-30°-W。SB1より北側はビット等の検出がまばらとなり、今調査区の最も北側に位置する建物である。

**規模等** 2間×3間規模の建物跡であり、身舎面積は24.8㎡である。柱穴配置はSH2、SH7が梁の方向からわずかに振れ、梁は、西側が東側に比べやや短い傾向が見られるものの、全体的には柱穴間距離の等しい配置となっている。

**埋土** 埋土A（黒褐色土：黒色粘質土混）

**遺物** 遺物の出土はない。

#### 2号掘立柱建物跡（SB2、第15・17図）

**位置** E5・F5グリッドで検出された。主軸方向N-45°-W。

**規模等** 東側桁行側の柱穴は削平によって検出できていないが、2間×3間規模の建物跡と復元され、身舎面積は推定25.6㎡である。柱穴配置は柱穴間距離2m前後の等間隔であり、柱筋が通っている。梁行側のSH2、SH4はSB1同様に他の柱穴よりも浅い掘り方である。

**埋土** 埋土B（黒褐色土：霧島御池軽石の少量混入）

**遺物** SH1から、土師器皿の小片が出土したが図化に堪えられなかったため未掲載とする。

#### 3号掘立柱建物跡（SB3、第15・17図）

**位置** E5・E6・F6グリッドで検出された。主軸方向がN-45°-Wであり、SB2と同一の主軸方向である。

**規模等** 2間×2間（一面庇）規模の総柱建物跡であり、身舎面積は21.3㎡。柱穴梁・桁行側の対辺が同じ柱穴間距離となるよう配置されており均整がとれている。SH10の柱穴深は約0.56mと、他の柱穴よりも深い。なお、SH6、SH7はSH5、SH8との柱穴間距離が他のものと短いこと、柱穴径が他の柱穴よりもやや小さいことから庇とみられる。

**埋土** 埋土B（黒褐色土：霧島御池軽石の少量混入）

**遺物** SH8、SH9 から土師器皿の小片、SH5 から黒色土器杯の口縁部小片、SH6 から黒色土器杯の底部小片が出土したが図化に堪えられなかったため未掲載とする。

#### 4号掘立柱建物跡（SB4、第15・16図）

**位置** F5・F6 グリッドで検出された。主軸方向N-45° -Wであり、SB2・SB3 と同一の主軸方向である。

**規模等** 南東部は削平されており検出できていないが、2間×2間規模のほぼ正方形の平面プランに復元され、身舎面積は推定15.1㎡である。全体的には柱穴間距離の等しい配置となっている。

**埋土** 埋土B（黒褐色土：霧島御池軽石の少量混入）

**遺物** SH1 から土師器杯の口縁部（44）、SH4 から土師器皿（45）、SH4 から黒色土器塊の体部片（46）が出土した。なおSH4 から土師器皿の底部小片が出土しているが図化に堪えられなかったため未掲載とする。

#### 5号掘立柱建物跡（SB5、第15・18図）

**位置** F6 グリッドで検出された。主軸方向N-45° -Wであり、SB2・SB3・SB4 と同一の主軸方向である。

**規模等** 後世の削平のため、部分的に柱穴を失うが、2間×3間規模と復元され、身舎面積は10.4㎡である。残存する柱穴は、ほぼ等間隔に配置され均整がとれている。

**埋土** 埋土B（黒褐色土：霧島御池軽石の少量混入）

**遺物** SH4 から古代の土師器甕の小片が出土したが図化に堪えられなかったため未掲載とする。

#### 6号掘立柱建物跡（SB6、第15・18図）

**位置** F6・F7 グリッドで検出された。主軸方向は、同じくN-45° -Wであり、SB2～SB5 と同一の主軸方向である。

**規模等** 南半分が調査区域外のため、建物の全体形は不明であるが、SB4 程度の規模と想定される。主軸方向、柱穴跡の配置を見ると、均整のとれた柱穴の配置になっている。

**埋土** 埋土B（黒褐色土：霧島御池軽石の少量混入）

**遺物** SH2 から中世の鉢、SH3 からは弥生土器甕の小片が出土したが図化に堪えられなかったため未掲載とする。

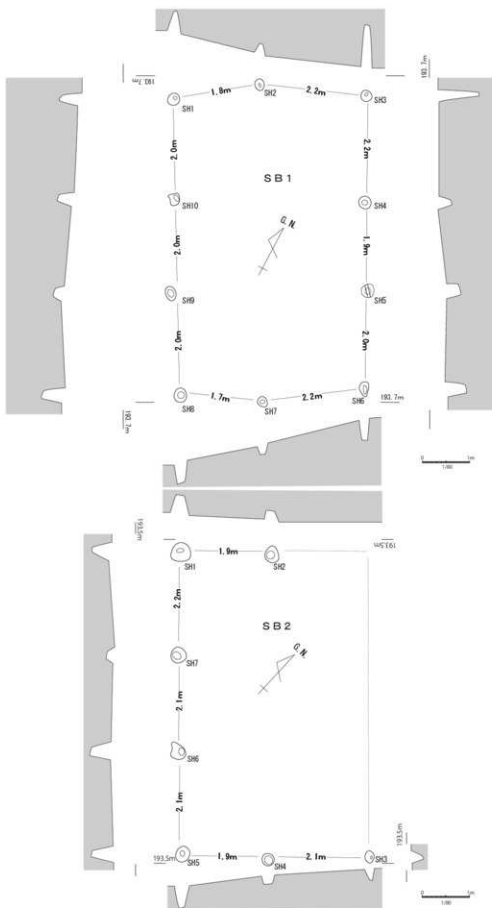
#### 7号掘立柱建物跡（SB7、第15・18図）

**位置** E5グリッドで検出された。主軸方向N-10° -W。

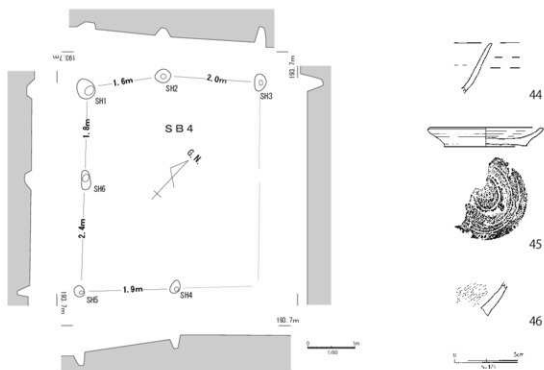
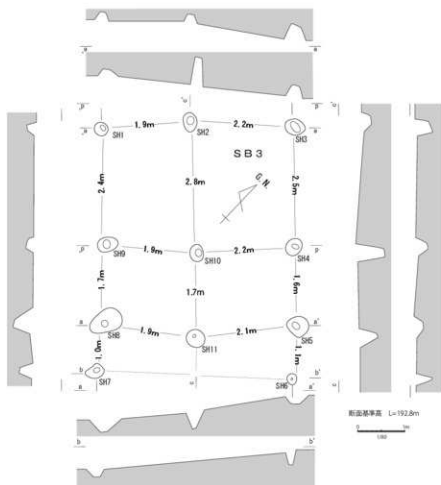
**規模等** 南西側を削平されているため、全体形は把握できないが、2間×2間規模の建物跡と想定される。梁行側、桁行側のそれぞれの柱穴間距離はほぼ等しい。

**埋土** 埋土B（黒褐色土：霧島御池軽石の少量混入）

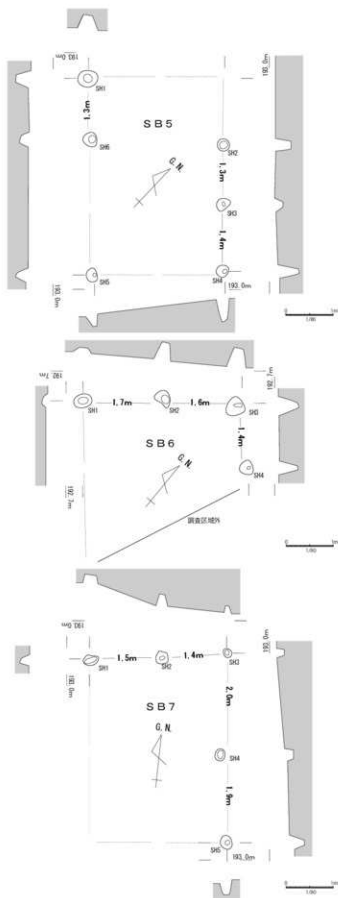
**遺物** 遺物の出土はない。



第16图 掘立柱建物跡実測図（1）（S=1/80）



第17图 掘立柱建物跡実測図(2) (S=1/80)・SB4出土遺物実測図(S=1/3)



第18図 掘立柱建物跡実測図(3) (S=1/80)

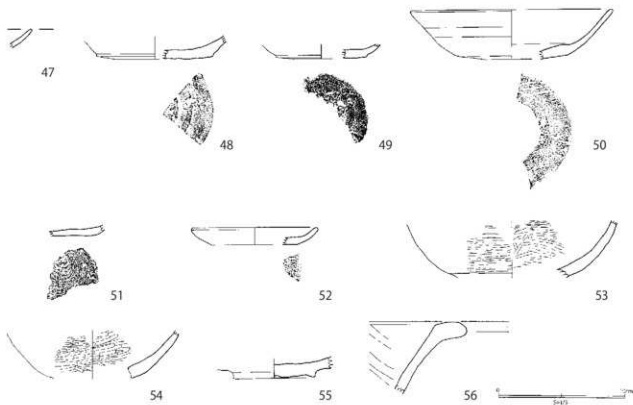
## (2) 小穴 (SH) 出土遺物

ここでは掘立柱建物跡以外の小穴 (SH) より出土した遺物について報告する。

47～51は土師器杯の破片資料である。47は杯の口縁部で胎土に2mm以下の軟質赤色粒を少量含む。48は杯の底部資料であり、底部外面には一部黒斑がみられる。49は底部片で、胎土は内外面とも灰黄褐色であり全体として黒味がかっている。50は底径がやや大きいものの器高が低いことが特徴である。51は糸切り痕が残る。他の土師器杯に比べて、胎土が橙色である。52は土師器皿である。底部はへら切り離してあり、口唇部をやや丸く収め、底部から胴部への立ち上がり付近に弱い屈曲がある。

53～55は黒色土器の埴である。54・55が黒色土器A類（内黒：内面のみを黒化处理）、53が黒色土器B類（両黒：内外面を黒化处理）である。A類とB類を比較すると、B類の焼成はA類に比べて堅緻であり、黒化处理が施された器表面には密なミガキが施されている。53は体部片であり、内外面ともに、丁寧なミガキが施されている。54は体部の破片で、内外面ともにミガキが施されている。内面の色調は灰から灰黄色へグラデーション化している。55は底部片で、内面は丁寧なミガキが施されており、外面はナデ調整されている。底部外面には短く上がった高台を張り付けている。

56は土師器鉢の口縁部片である。逆L字状の口縁でその端部は分厚く肥厚する。外面は丁寧な横方向のナデ、内面は斜方向のケズリ調整である。



第19図 小穴群出土遺物実測図 (S=1/3)

### (3) 周溝墓 (SM1、第20図)

**検出状況** 1号周溝墓はE5・F5グリッドにて検出された墓壇と周溝で構成される遺構である。付近には、掘立柱建物跡 (SB2・SB3) などが位置する。この周溝墓は、大溝遺跡と小迫遺跡を隔てる開析谷と対面する位置関係にある。

検出面はVII層 (霧島御池軽石層) で、墓壇と周溝の南側約半部分が残存している。これは後世の畑地造成によって、VII層まで大きくかつ水平に削平されたためである。本来の掘り込み面は、VI層 (古代～中世の遺物包含層) の層厚から考えると、検出面よりも約0.2 m程度高い位置にあったとみられ、周溝墓は北側から南側に向けての緩斜面上に位置していたものと復元される。なお、墓壇や周溝部分は数条におよぶトレンチヤー (ゴボウ作付けに伴う機械掘削) による攪乱を受けていた。

**規模等** 墓壇の平面形は不整な長方形である。長軸長約2.44 m (残存長)・短軸長約1.4 m (残存長)・検出面からの深さは約0.3 m (最深部) を測る。主軸方位はN-45° - Eで、断面形は箱型ないし、逆台形状を呈するが、その底面は中央部分がくぼんでいる。また、墓壇の北辺部分は三角形状に張り出す掘り込みで、その中央部はピット状となる。なお、墓壇の掘り下げは、平面・断面ともに土層観察を踏まえながら慎重に進めたが、木棺等の痕跡は確認されなかった。

周溝の平面形は、墓壇からみて西側部分は隅角状の布掘りとなることから、方形プランとも考えられるが、内縁側 (墓壇側) の削平ラインが円弧を描くことを重視して、楕円形とみなしたい。周溝の幅は、約3.1 m～4.4 m (上端部分) で、検出面からの深さは約0.12 mと浅く、断面形は箱型ないし、逆台形状を呈する。陸橋の有無については不明である。

なお、墓壇の主軸線は、周溝の主軸線 (周溝東西側の外縁・内縁を結んだ垂直二等分線) よりも東側に偏った位置にあることが読み取れる。これは、墓壇の西辺ラインが周溝の主軸線に重なるためである。

**埋土** 墓壇と周溝の埋土は共通しており、ともに霧島御池軽石を含む暗褐色土の色調で粘性や土の締め具合もない土質である。この色調は遺構検出面 (VIIa層) のやや濁った色合いであり、周溝墓周辺のピットや掘立柱建物跡の埋土 (黒褐色土) とは明らかに異なる。

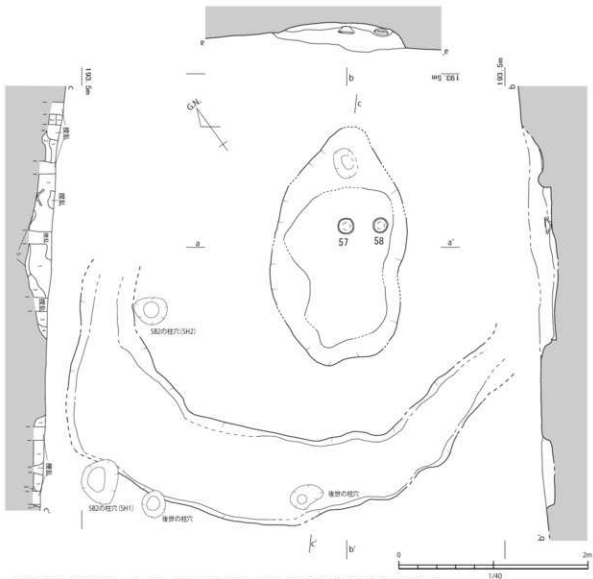
**遺物の出土状況** 周溝墓の遺物は、墓壇内より白磁碗 (57)、土師器杯 (58) の2点が出土したのみで、人骨の遺存は認められなかった。白磁碗と土師器杯は周溝墓の副葬品と考えられ、墓壇の長軸線 (主軸線) 付近から東側、短軸線よりも北側に偏在した位置で底面に密着した状態で出土した。また、ともに口縁部を上にした正置の状態で、約0.3 mの間隔をおいて並列する配置状況であった。内容物の有無については、水洗選別を行ったが、微細遺物などの存在は確認されなかった。

出土遺物と遺骸の位置関係については、人骨そのものの検出がなかったため、推測の域をでないが、白磁碗と土師器杯は頭部を挟んで対置されるか、頭部より上方に置かれたものと考えられる。その場合、遺骸は墓壇の長軸線付近から東側で墓壇北辺の突出部分を除いた約1.6 m×0.6 mの範囲に納められたと考えられ、成人であれば側臥屈葬とみられる。

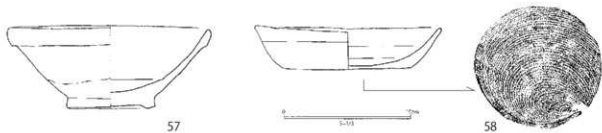
**遺物** 白磁碗 (57) は完形品であり、口縁部は扁平な玉縁を有し、全体的に肉厚の器体である。高台は幅広く、内部の刺りも浅く粗雑なつくりであり、見込みには沈線が一条巡る。大宰府編年IV-1a類 (太宰府市教委2000) に該当する。

58は土師器杯で、完形品である。体部は丸みをもって立ち上がる。底部外面にはス切り痕がある。器表外面全体はスが付着している。





1. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり、粘性ともになし。1mm~2mm程の黄褐色粒が多く含まれる。1mm程の灰白色粒が少し含まれる。
2. 暗褐色土 (10YR3/3) 1の床面 (VIIb層) の土がブロック状に含まれる。
3. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり、粘性ともになし。1に床面 (VIIb層) の土が少し含まれる。
4. 黄褐色土 (10YR5/6) しまり、粘性ともになし。検出面 (VIIa層) の土に3を含む。湿じり気が多い土。
5. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり、粘性若干あり。色調は3に似るが、1mm~2mm程の黄褐色色粒は微量に含まれる。床面 (VIIb層) の土がブロック状に含まれる。

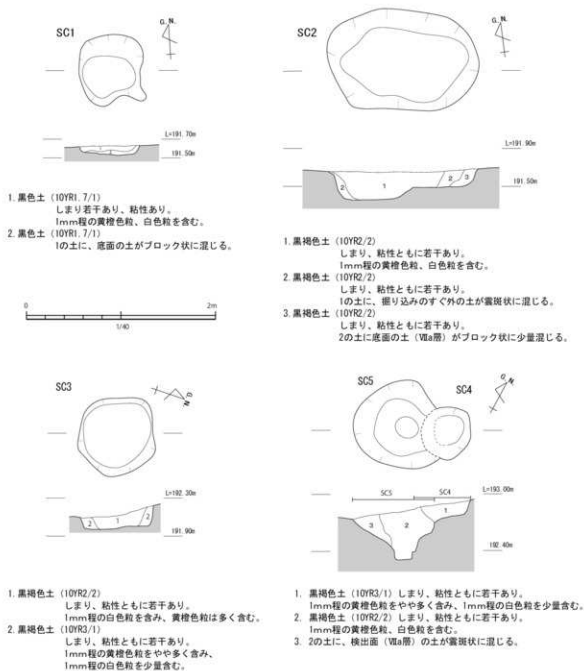


第20図 1号周溝墓 (S=1/40) 及び遺構内出土遺物実測図 (S=1/3)

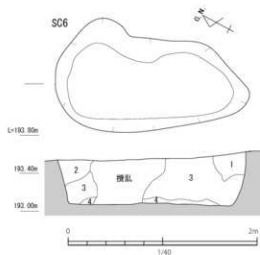
#### (4) 土坑

VIIa層上面では、15基の落ち込みが検出されたが、完掘時の形状や埋土状況の観察結果から樹根等の可能性が高いものを除いた7基を土坑として報告する。そのうち4基の土坑から遺物が出土したため、これを図化した(第21図)。規模的には長軸が1m未満の土坑が2基、1mを超える土坑が4基あり、その内、SC6、SC7の2基は2mを超える大型の土坑である。遺構プランとしては円形、楕円形、隅丸長方形が認められる。また、SC4、SC5は切り合い関係が確認された。

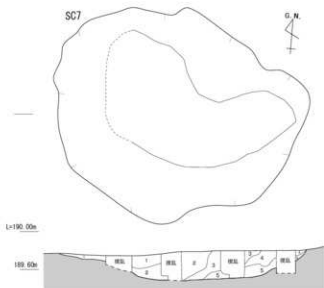
これらの土坑の埋土は主に黒褐色土であり、掘立柱建物跡柱穴の埋土と極めて類似していることから、土坑と掘立柱建物跡は同時または近接した時期の関係にあると考えられる。



第21図 土坑実測図 (1) (S=1/40)



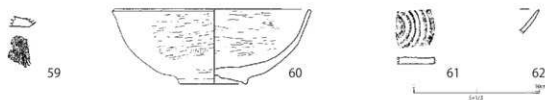
1. 黒褐色土 (7.5YR3/2)  
しまり、粘性ともにややあり。  
3の土と攪り込みのすぐ外の土 (10YR3/4の暗褐色土、1~5mm程の黄褐色ボラ、1mm程の白色粒がともに多く混じる)との混成土。  
黄褐色ボラがやや多く混じる。
2. 黒褐色土 (10YR2/3)  
3の土と色調は同じ、1~5mm程の黄褐色ボラ、1mm程の白色粒は、3の土より多く含むが、1よりは少ない。
3. 黒褐色土 (10YR2/3)  
しまり、粘性ともにややあり、1~5mm程の黄褐色ボラ、1mm程の白色粒を少し含む。
4. 黒褐色土 (10YR3/3)  
3の土に底面の土 (10YR3/4の暗褐色土、粘性があり、粒やボラはほとんど混じらない)が雲斑状に混じる。



1. 暗褐色土 (7.5YR3/4)  
しまり若干あり、粘性なし。  
2の土に、にぶい黄褐色土が雲斑状に混じる。
2. 暗褐色土 (7.5YR3/4)  
しまり若干あり、粘性なし。  
1~2mm程の黄褐色粒を多く含む、1mm程の白色粒を含む。
3. 褐色土 (10YR4/6)  
しまり若干あり、粘性なし。  
1~2mm程の黄褐色粒を多く含む、1mm程の白色粒を含む。
4. 暗褐色土 (7.5YR3/4)  
しまり若干あり、粘性なし。  
2の土に似るが、2の土より黄褐色粒、白色粒ともに多く含む、部分的に3の土が混じる。
5. 暗褐色土 (7.5YR3/4)  
しまり若干あり、粘性なし。  
1~2mm程の黄褐色粒を多く含む、1mm程の白色粒を含む。3と4の土が均等に混じった混成土である。

#### 土坑出土遺物

59は、SC1出土の土師器の坏の底部片で糸切り痕がある。60は、SC3出土の黒色土器の塊である。やや退化傾向にある低く幅の狭い高台を有し、器表面は内外とも密にミガキが施される。61は、SC4出土の土師器坏または皿の底部で、内面は同心円状に凹線が巡る。62は、SC5出土の白磁皿口縁部であり、大宰府分類白磁皿VI類もしくはVII類に相当する(太宰府市教委2000)。



第22図 土坑実測図(2) (S=1/40)及び出土遺物実測図(S=1/3)

### 3 古代～中世の遺物包含層出土遺物

層位的には基本層序におけるVI層が古代から中世の遺物の主たる包含層である。出土状況としては、調査区南側は包含層が削平されており、北側のF6・E7グリッド付近に集中する傾向が見られた。遺構に伴うものは少なく、その多くが包含層からの出土である。

出土遺物の中では土師器が大半を占めており、土師器の中でも坏が最も多い。また小片は摩耗しているものの、ある一定の大きさを持つ破片については摩耗していない状況が窺える。

出土種類を大別すると、土師器質食膳具としての坏（高台付碗を含む）・堦（黒色土器を含む）・皿、土師器煮沸具としての甕、鉢、製塩土器、須恵質の貯蔵具が出土している。また、白磁・青磁といった中国産陶器、土製品、石製品、鉄器・鍛冶関連遺物も出土している。以下、既存の研究をもとに、できる限り変遷に沿って掲載した。詳しい時期差については第IV章にて記載する。

#### (1) 土師質食膳具（坏・堦・皿類）

##### (a) 土師器坏

土師器坏は、23点図化・掲載した。坏類は法量や底部切り離し技法から大きく5つに区分（I類～V類）することができる。

##### I類（第23図63～65）

口径約13cm～13.6cm、底径約7cm前後で底部切り離し技法は回転ヘラ切りの一群である。65は器形全体が復元できる資料であり、口径13cm、器高5cm、底径7.7cmである。底部と体部立ち上がりとの境はやや不明瞭で、口縁部端部は外方に開き気味の器形である。底部の厚みは見込み部分が薄くなっている。

##### II類（第23図66～69）

66～69は、65の坏よりは若干小ぶりである。口径約12.5cm、底径約7cm前後で底部切り離し技法は回転ヘラ切りの一群である。I類に比べて口径が小さめとなり、底部の見込み部分は水平に近くになり、その厚みは増す。69は器形全体が復元できる資料であり、口径12.6cm、器高4.4cm、底径7.5cmである。体部は直線的に開き、口縁部は鋭く尖る。

##### III類（第23図70～73）

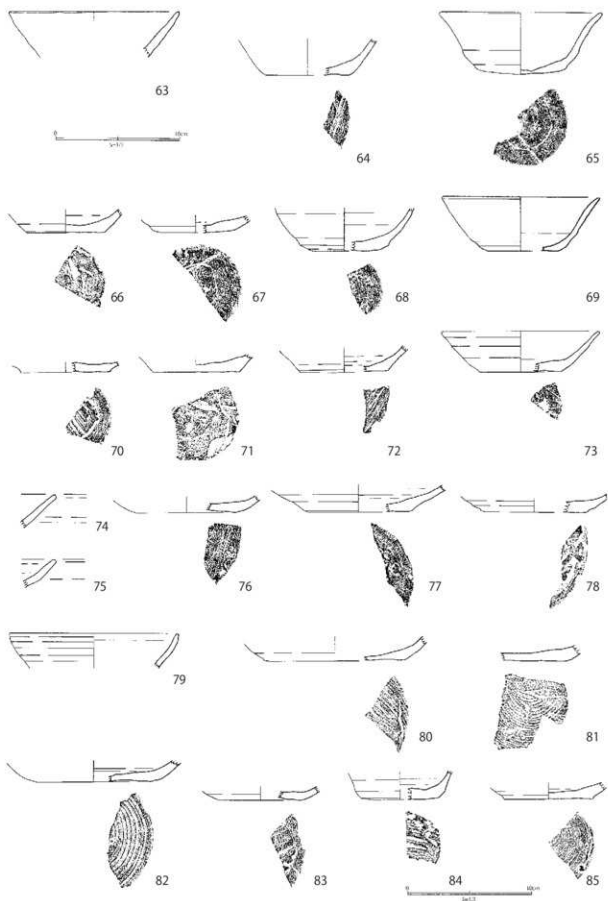
口径約12.5cm、底径約7cm前後で底部切り離し技法は回転ヘラ切りの一群である。色調は、浅黄橙色であり、胎土は軟質の赤色粒や褐色・灰白色粒を少量含むという特徴を持つ。II類に比べて底径は大きくなるが、器高は低くなる。底部と体部の立ち上がりの境は明瞭となる。73は器形全体が復元できる資料であり、口径推定12.5cm、器高3.3cm、底径推定6.6cmである。体部は直線的に開き、その外面には回転ヨコナデ調整による弱い稜が数段現れる。

##### IV類（第23図74～78）

底径約8.6cm前後で底部切り離し技法は回転ヘラ切りの一群である。色調は、浅黄色であり、胎土は微細な光沢粒をわずかに含む程度の特徴を持つ。III類に比べて底径はさらに大きくなり、体部は大きく開く器形となる。74・75は口縁部資料で口径等の法量は不明であるが、色調や胎土は76～78と類似していることからIV類とした。

##### V類（第23図79～85）

底部切り離し技法は回転ヘラ切り（83・84）と回転糸切りの一群である。79は、底部を失う資料であるが、想定される底径の大きさからV類とした。80～82はIV類に比べて底径はさらに大きくなる。83～85の底径はII類と同法量であるが、胎土及び底部切り離し技法のあり方からV類に含めた。



第23图 包含層出土遺物実測図(1) (S=1/3)

(b) 土師器高台付塊 (第24図 86~94)

土師器の高台付塊は、9点図化・掲載した。全体形がわかるものではなく、破片資料のみである。86~88は底部ないし高台部を失うもの、89~91は口縁部と高台部を失うもの、92~94は高台部分である。色調は淡黄橙色もしくは浅黄色を基調とする。胎土は赤色粒や褐灰色・黒褐色粒を含む。法量的にまとめることが可能で、86・89(口径約13.3cm)、87・90(口径約13.8cm)、88・91(口径約14.6cm)のタイプに細分できる。86・87の体部は直線的に開くが、88はやや内湾気味となる。89は高台と体部の境に幅広い粘土帯が張り付いている。90の内面にはミガキ調整が認められる。高台は、92・93(高台径約7.2cm)の短く外方に開くタイプと94(高台径約6.2cm)のように径が小さく、器厚の薄いシャープな造りの高台部を持つものがある。

(c) 黒色土器塊 (第24図 95~104)

図化した9点の資料は、黒色土器A類(内黒:内面のみを黒化処理)とB類(両黒:内外面を黒化処理)が確認されている。A類とB類を比較すると、B類の焼成はA類に比べて極めて良好である。なお黒化処理が施された器表面にはすべて密なミガキが施されているが、器表面が風化気味でミガキの単位が判然としないもの(96・97)についてはミガキの方向等を図化していない。

黒色土器A類 (第24図 95・99・101・104)

95は塊の口縁部破片資料であり、内面は丁寧なミガキが施されている。101は底部~体部の破片資料であり、内面は丁寧なミガキが施されている。外面はミガキが施されているが、一部に黒斑がある。推定底径7.6cmである。104は高台付塊であり、高台径は約5.6cmである。内面は丁寧なミガキを施しており、退化した低い高台は外方に開いている。

黒色土器B類 (第24図 96~98・100・102・103)

96~98は塊の口縁部破片資料である。96は皿にも類似するが塊として報告する。97は内外面ともにミガキが施されているが、風化が著しいため単位が判然としない。98は特に内面において丁寧なミガキが施されている。102・103は高台付塊の底部付近である。102はしっかりした厚みのある造りで、底部が残存しており底径5.9cmである。高台は短めであるが、やや厚みがある。103は密にミガキを施し、丁寧な調整が行われ、体部は大きく開いている。底径は推定6.4cmであり、高台はしっかりしているものの、低くやや細めになっており、退化傾向が感じられる。

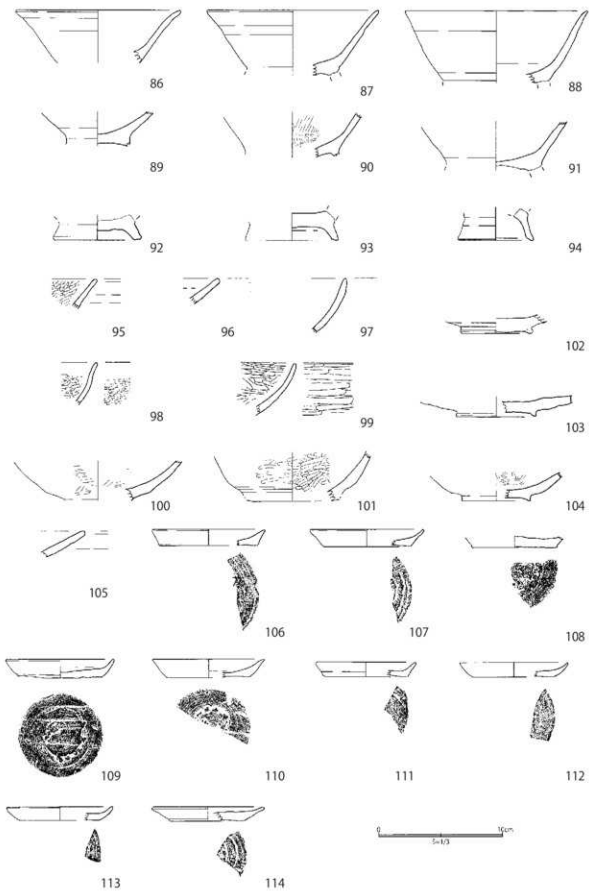
(d) 土師器皿 (第24図 105~114)

土師器皿は10点を図化・掲載した。法量的にはさほど大きな差はなく口縁は約8~9cm、器高約1~1.6cm、底径約6.5~8cmとある程度まとまりのある一群である。底部切り離し技法はすべて回転ヘラ切りである。109はほぼ完存品であり、口径8.7cm、底径6.9cm、器高1.6cmを計る。底部に板目状の圧痕がみられる。

(2) 土師質煮沸具(甕・鉢類)

(a) 甕 (第25図 115~122)

8点すべて図化・掲載した。115~122は甕の口縁部~胴部付近の資料である。口縁部の形状は「く」の字ないし逆L字状(115~119)、稜をもたず外方に開くもの(120)がある。115は器壁がやや薄手で口縁端部は平滑気味に仕上げる。胎土に褐色粒、褐灰色を多量に含む特徴がある。116~122は115よりも大きい甕である。口径は27cm~28.2cmである。116の口径は28.2cmで、



第24图 包含層出土遺物実測図(2) (S=1/3)

口縁部から胴部への内面変化点に明瞭な稜が認められ、口縁端部は丸く収める。やや直立気味に立ち上がる。117の内外面の調整は、外面がていねいなナデ、内面はヘラケズリであり、内面の口縁部から外面の頸部にかけての一部にススが附着している。119・120は口縁部の屈曲が他と比べて弱い。119の内面には細かなカキ目が施されている。121の胴部形態はあまり張らない。外面は、器面全体をハケ調整の後、頸部直下をカキ目調整で仕上げている。122の胴部外面調整は、平行タタキ後にカキ目調整が施されている。胎土に大粒の砂粒は少なく、焼成具合も硬質である。

(b) 鉢 (第25・26図 123~127)

123~127は鉢の口縁部もしくは口縁部~胴部資料である。胴部最大径は口縁部直下となるため胴部に張りがなく、口縁よりも器高が低いことから鉢とした。口縁部の横ナデ、内面の口縁部から胴部への屈曲部以下のヘラケズリ、外面のナデ調整は各個体とも共通している。124は外面に、126は内外面の一部に黒斑がみられる。125は推定口径28.2cmの大型の鉢である。126は逆L字状の口縁部形態を有し、明瞭な稜が認められる。127は全体的な器形を把握することができる。丸底の底部をもち、胴部が張り出さず、上方に向かい立ち上がる。推定口径は27.4cmである。

(3) 製塩土器 (第26図 128~131)

内面に布目圧痕を有する製塩土器でいわゆる布痕土器である。器面の調整は、外面を粗いナデ、口縁部をヘラ等の工具でそぎ落とし必要に応じて、ナデを施す程度である。128は鉢形土器の口縁部片、129・130は胴部片、131は底部片ではあるが、いずれも別個体である。胎土は砂粒を含む。

(4) 須恵質貯蔵具(壺類) (第26図 132)

須恵器は5点出土したが、図化・掲載したのは132の1点のみであった。小破片であるため、傾きは不明である。外面に格子目タタキ痕、内面に平行当て具痕が認められる。

(5) 中国産磁器

(a) 白磁(碗・皿) (第26図 133~141)

133~139は白磁碗の口縁部片である。133~138は玉縁状、139は口縁端部を小さく丸め、外方にやや尖らせた形状である。133は口縁部下に4mm幅の凹線、134は口縁部下に3mm幅の凹線がみられる。これらは「大宰府編年白磁碗Ⅳ類」に該当する。138は焼成後に火を受けたのか、内外の施軸部分の表面に気泡が多く、ざらついた手触りである。139は「大宰府編年白磁碗Ⅴ類」に該当する。140は白磁碗の底部で、体部外面下位から無軸、高台は幅広で内部の削りも浅く、見込みに沈線がみられることから「大宰府編年白磁碗Ⅳ-1a類」に該当する。141は体部上部がやや内湾する皿である。「大宰府編年皿Ⅵ類もしくはⅦ類」(太宰府市教委2000)に該当する。

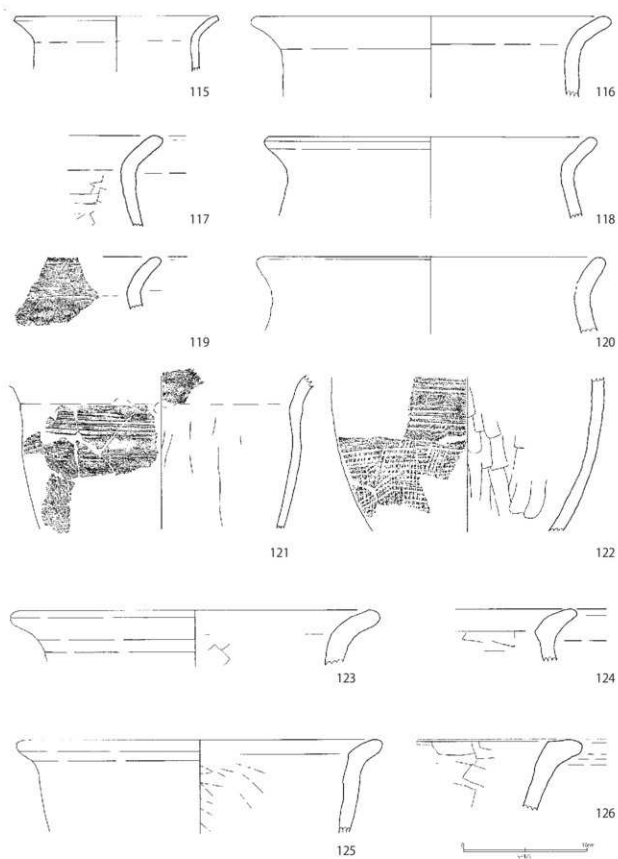
(b) 青磁(碗) (第26図 142)

142は龍泉窯系青磁碗の口縁部片で、口縁端部は若干外反する。外面には弁の中心に稜を持つ幅広の鋸連弁文を描く。「大宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅱ類」(太宰府市教委2000)に該当する。

(6) 土製品 (第27図 143)

143は紡錘車である。土師器坯の底部を再加工したもので、約半分が遺存する。復元径は6.6cmで中心に約1.2cmの円孔を穿つ。紡錘車の周縁は比較的丁寧に打ち欠かされている。





第25圖 包含層出土遺物實測圖(3) (S=1/3)

(7) 滑石製石鍋 (第27図 144・145)

144・145は滑石製石鍋の破片資料で、何らかの再利用品として加工途中で放棄したものと考えられる。144は、把手の隆起部分がやや低いものの、瘤状把手と考えられる。破片の周縁は鋭利な利器による切断面や削り出しの箇所がある。内面側の中央部分に直径約0.8cmの穴を途中まで穿孔している。また、瘤状把手の有機部分が幅狭くなってきており、剣先状に収束している。図面は収束部分を上向きにしたが、下向きの可能性も含まれる。145は、口縁部付近で、外面にスズが付着する。内面の上・下縁部分には、鋭利な利器による細かい線状の加工痕が密に入る。

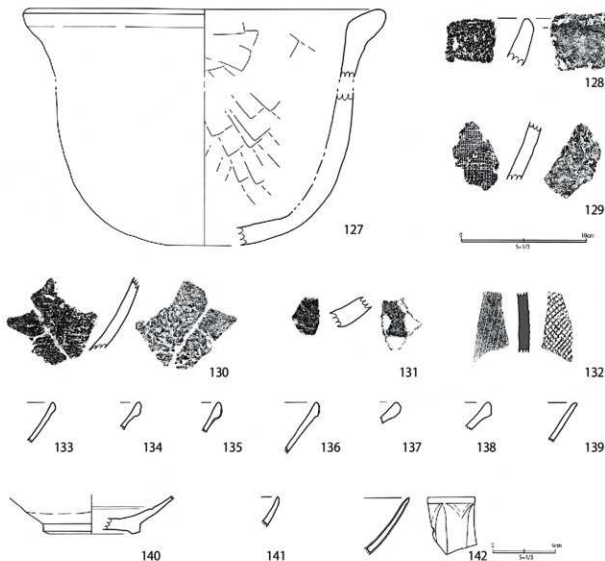
(8) 鉄器・鍛冶関連遺物

(a) 鉄器 (第27図 146)

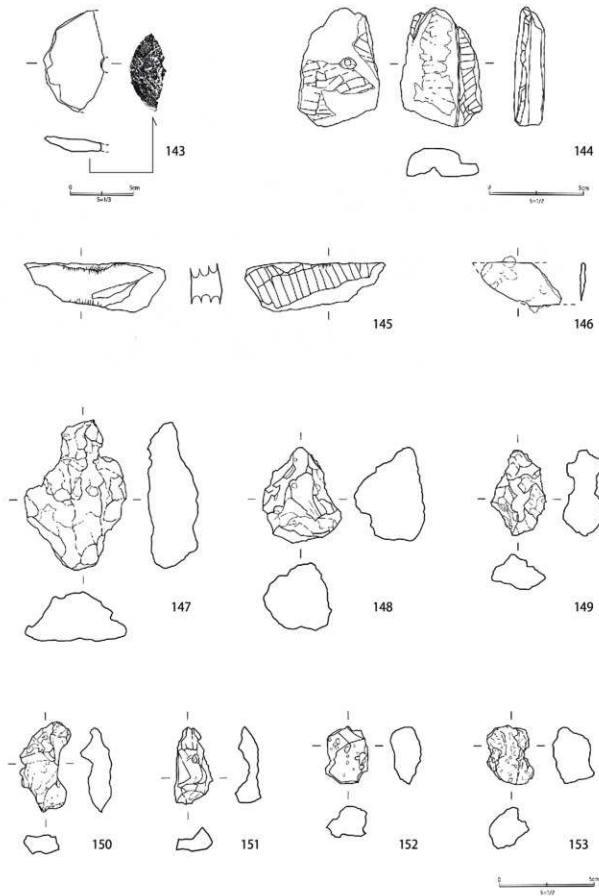
146は、刀子または庖丁の鋒部分と考えられる。全体的に薄い造りである。

(b) 鍛冶関連遺物 鉄滓 (第27図 147~153)

鍛冶関連遺物として鉄滓や鉄塊系遺物などを27点中8点図化・掲載した。147~149は坩堝鍛冶滓である。ともに分割ないし破片化していると考えられるが、147は重量感がある。150・151は鉄塊系遺物で、小型で不整形である。152・153は鉄滓ないし炉壁の一部と考えられる。表面の一部に著しく赤化した黄褐色の土が付着している。



第26図 包含層出土遺物実測図(4) (S=1/3)



第27図 包含層出土遺物実測図(5) (S=1/3、1/2)

## 第7節 時期不明の遺構

### 1 概要

時期不明の遺構としては、溝状遺構が1条ある。

### 2 溝状遺構 (SE1, 第2・4図)

調査区の南壁付近のVIIb層上面にて、溝状遺構 (SE1) が検出された。調査区外に延びていくため、全長は不明であるが、長さ (現存長) 約6 m、幅約1.6 m、検出面からの深さは0.25 mで、断面形は浅い皿型を呈する。埋土は、黒褐色～暗褐色系統の土色である。

遺構の時期は埋土中の遺物もなく検出層位やその上層の堆積土層から求めることは困難であるが縄文時代後期～晩期 (VIIb層) よりは新しく造成時 (III層) には埋没していたものと考えられる。

第1表 竪穴建物跡 (SA) 一覧

遺構名	平面形	直径 (m)	床面積 (㎡)	主柱穴	出土遺物	時期
SA1	隅丸方形	4.7	15.7	9	縄文土器 (中岳II式)	縄文後期

第2表 掘立柱建物跡 (SB) 一覧

遺構名	規模	主軸方向	桁行 (m)	梁行 (m)	面積 (㎡)	柱穴径 (cm)	柱穴深 (cm)	備考
SB1	2間×3間	N-30°-W	6.2	4.0	24.8	16~28	24~82	
SB2	2間×3間	N-45°-W	6.4	4.0	25.6	16~40	20~48	
SB3	2間×2間	N-45°-W	5.1	4.1	21.3	20~64	16~56	一面庇柱建物跡
SB4	2間×2間	N-45°-W	4.2	3.6	15.1	10~40	20~40	遺物出土 (44~46)
SB5	2間×3間	N-45°-W	4.0	2.6	10.4	24~40	16~48	
SB6	2間×1+α間	N-45°-W	1.4+α	3.7	4.7+α	24~40	12~40	一部検出できず
SB7	2間×2+α間	N-10°-W	3.9+α	2.9	11.3+α	16~32	16~24	一部検出できず

第3表 周溝墓 (SM) 一覧

主軸方向		N-45°-E		検出位置		E5・F5グリッド
墓壇	長軸	約2.5 m	短軸	約1.4 m	深さ	約0.3 m
周溝外縁	長軸径	推定4.9 m	短軸径	推定4.2 m	深さ	
周溝内縁	長軸径	推定2.8 m	短軸径	推定2.6 m	深さ	約0.2 m

第4表 土坑 (SC) 一覧

遺構名	平面形	直径 (長軸)	短軸 (m)	深さ (m)	平面積 (㎡)	出土遺物	時期
SC1	不整形円形	0.8	0.7	0.08	0.38	土師器坏	中世
SC2	槽円形	1.6	1.0	0.3	1.32	—	中世
SC3	円形	0.8	0.7	0.2	0.47	黒色土器塊	中世
SC4	円形	0.6	0.5	0.2	0.22	土師器坏	中世
SC5	槽円形	1.2	0.9	0.5	0.81	白磁皿	中世
SC6	槽円形	2.0	0.9	0.5	1.71	—	中世
SC7	槽円形	2.6	2.2	0.3	4.45	—	中世

第5表 土器観察表

遺物 番号	種別	形状 部位	出土地点	測量(m)				手法・状態・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	高さ	厚さ	外側	内側	外側	内側		
1	縄文土器	深鉢 口縁部	R5					ナブ	ナブ	灰黒色 (1P19/4)	暗褐色 (1P19/6)	2mm以下の灰白色、にじみ黄褐色、微細な光沢 を含む	
2	縄文土器	深鉢 口縁部	C5					縄文織文のハチ折 付突帯	横方向のナブ	にじみ黄褐色 (1P19/6)	にじみ黄褐色 (1P19/6)	1mm程度の灰白色、2mm程度の暗褐色を土中に含み、2mm以下の灰白色、灰褐色、透明光沢を含む	
3	縄文土器	深鉢 口縁部	SA1					沈積文 ナブ、スズ付帯	ナブ、黒泥	にじみ黄褐色 (1P19/6)	にじみ褐色 (1P19/6)	2mm以下の灰白色、黄褐色、透明光沢、微細な 光沢を含む	
4	縄文土器	深鉢 口縁部	SA1					新製文 ナブ	ナブ	暗(1P19/4)	暗(1P19/4)	2mm以下の灰白色、透明光沢、暗褐色を含む 。黄褐色光沢を多量に含む	
5	縄文土器	深鉢 口縁部	SA1					横方向の条帯状、 横方向の粗い七 びき、沈積文	横方向の条帯状、 横方向の粗い七 びき、黒泥	にじみ褐色 (1P19/6)	にじみ褐色 (1P19/6)	1mm以下の暗褐色、2mm以下の暗褐色、暗赤 色を土中に含む	
6	縄文土器	深鉢 胴部	SA1					横方向の片拵 横方向の沈積文 多方向の片拵	横方向の七びき	にじみ褐色 (1P19/6)	にじみ黄褐色 (1P19/6)	2mm以下の灰白色、暗褐色、暗赤赤色を少量 含む、微細な光沢を含む	
7	縄文土器	深鉢 口縁部→胴部	R6					沈積文	ナブ	暗赤褐色 (1P19/6)	暗(1P19/4)	2mm以下の黄褐色、灰白色、透明光沢、微細 な光沢を含む	
8	縄文土器	台付 深 口縁部	R6					新製文、沈積文 ナブ	ナブ	暗赤褐色 (1P19/6)	暗赤褐色 (1P19/6)	2mm以下の灰白色、暗褐色、暗赤赤色、透明 光沢を多量に含む	厚み約1cm
9	縄文土器	深鉢 口縁部	C7					沈積文、多方向の 七びき、黒泥	ナブ、黒泥	暗赤褐色 (1P19/6)	暗赤褐色 (1P19/6)	2mm以下の透明光沢、黄褐色、灰白色、黄色 光沢、暗褐色、微細な光沢を多量に含む	
10	縄文土器	深鉢 口縁部	R6					横方向の片拵 沈積文	七びき、ナブ、黒泥	にじみ褐色 (1P19/6)	にじみ黄褐色 (1P19/6)	2mm以下の暗褐色、2mm以下の灰白色を土中に 含む、微細な透明光沢を土中に含む	
11	縄文土器	深鉢 口縁部	C6					横方向の七びき 黒泥	横方向の七びき 黒泥	暗(1P19/6)	暗(1P19/6)	2mm以下の灰白色、2mm以下の透明光沢を土中 に含む	
12	縄文土器	深鉢 口縁部	R5					横方向の片拵 条帯、沈積文	横方向の七びき	にじみ黄褐色 (1P19/7)	にじみ黄褐色 (1P19/7)	1mm以下の灰白色、2mm以下の光沢、黒褐色 を含む	
13	縄文土器	深鉢 口縁部	R5					横方向の片拵	ナブ	にじみ黄褐色 (1P19/7)	にじみ黄褐色 (1P19/7)	2mm程度の透明光沢を土中に含む、2mm以下の 暗赤褐色、灰白色、黄褐色、暗褐色、透明 光沢を多量に含む	
14	縄文土器	深鉢 胴部	R7					横方向の片拵 太付帯	横方向の七びき 横方向のナブ	赤褐色(1P19/6)	暗赤褐色 (1P19/6)	1mm程度の灰白色を土中に含む、2mm以下の 暗赤褐色、灰白色、黄褐色、暗褐色、透明 光沢を多量に含む	
15	縄文土器	深鉢 口縁部	R7					横方向の片拵 太付帯	横方向の七びき 横方向のナブ	暗(1P19/7)	暗(1P19/7)	2mm以下の灰白色、暗褐色、暗赤赤色を土中 に含む、微細な光沢を含む	
16	縄文土器	深鉢 胴部	C6					多方向の条帯 横方向の七びき	多面帯、粗い一方 の七びき	にじみ褐色 (1P19/7)	にじみ黄褐色 (1P19/7)	2mm以下の灰白色、2mm以下の暗褐色、光沢 を含む	
17	縄文土器	深鉢 胴部	R7					横方向の粗い七 びき、黒泥	ナブのハチ折付帯の 七びき、黒泥	暗赤褐色 (1P19/6)	暗赤褐色 (1P19/6)	2mm以下の灰白色、透明光沢、黄褐色、黄色 光沢を含む	
18	縄文土器	深鉢 胴部	R6	(8.8)				横方向の片拵 (黒化部)	横方向の七びき (黒化部)	暗赤褐色 (1P19/6)	灰褐色 (1P19/6)	2mm以下の透明光沢、黄褐色、灰白色、暗赤 色を土中に含む	
19	縄文土器	深鉢 口縁部	R6					七びき(黒化部)	ナブ	にじみ褐色 (1P19/6)	にじみ褐色 (1P19/6)	2mm程度の暗褐色を土中に含む、1mm以下の 黄褐色、黄色光沢、黄褐色、灰白色を含む	
20	縄文土器	深鉢 口縁部	R6					横方向の七びき 黒泥	横方向の七びき 黒泥	暗(1P19/7)	暗(1P19/7)	2mm以下の透明光沢、灰白色、暗赤赤色を含む 。1mm程度の暗褐色を土中に含む	
21	縄文土器	深鉢 口縁部	R6					七びき(黒化部) 条帯、スズ付帯	七びき(黒化部)	にじみ黄褐色 (1P19/7)	にじみ黄褐色 (1P19/7)	2mm以下の灰白色、2mm以下の暗赤赤色、2mm以下の 灰白色を土中に含む、微細な光沢を少量 含む	
24	弥生土器	壺 口縁部	C7					横ナブ、斜方向 のハチ折、スズ付 帯	横方向のナブ	にじみ黄褐色 (1P19/7)	にじみ黄褐色 (1P19/7)	2mm以下の灰白色、1mm以下の暗褐色、微細な 光沢を含む	
25	弥生土器	壺 口縁部	R6					ナブ	横方向のナブ	にじみ黄褐色 (1P19/7)	にじみ黄褐色 (1P19/7)	2mm以下の灰白色、暗褐色、暗赤赤色を含む	
26	弥生土器	大壺 口縁部→胴部	R7	(6.2)				横方向のナブ、沈 積文、斜方向の ハチ折、スズ付 帯	斜方向のナブ、横 方向のハチ折、ナ ブ	にじみ褐色 (1P19/6)	にじみ褐色 (1P19/6)	2mm以下の灰白色を少量、2mm以下の黄色光沢 を多量含む、2mm以下の暗赤赤色、半透明光沢 の付け突帯	
27	弥生土器	壺 口縁部	SA1					横方向のナブ 多方向の片拵	横方向の七びき	暗(1P19/6)	暗(1P19/6)	1mm程度の灰白色を土中に含む、2mm以下の 灰白色、光沢、暗褐色を含む	
28	弥生土器	壺 胴部	C6					横方向の片拵 条、斜め、横方向 の七びき(黒化部)	横ナブ、ナブ の七びき(黒化部)	暗(1P19/6)	にじみ黄褐色 (1P19/6)	2mm以下の透明光沢を少量含む、2mm以下の灰白 色、黄色光沢を土中に含む	
29	弥生土器	壺 底部	D6	(4.3)				ナブ黒ナブ	ナブ	暗(1P19/6)	にじみ黄褐色 (1P19/7)	2mm以下の灰白色、微細な黄色光沢を土中に 含む、2mm以下の透明光沢を少量含む	
30	弥生土器	壺 高部付	C6					多方向の七びき	ナブ(黒化部)	暗赤褐色 (1P19/6)	灰褐色 (1P19/6)	2mm以下の透明光沢を多量含む、2mm以下の暗 褐色、灰白色、1mm以下の黄色光沢を土中 に含む	
44	土師器	深 口縁部→底面	SH106					片拵ナブ	片拵ナブ	黄褐色 (1P19/4)	黄褐色 (1P19/4)	2mm以下の軟赤褐色、1mm以下の暗褐色を土中 に含む、微細な光沢を土中に含む	
45	土師器	小壺 口縁部→底面	SH109	(9.3)	(6.4)	1.50		片拵ナブ	片拵ナブ	黄褐色 (1P19/4)	黄褐色 (1P19/4)	微細な光沢を少量含む	
46	弥生土器	壺 胴部	SH109					横方向の七びき ナブ	横方向の七びき	黄褐色 (1P19/6)	暗(1P19/7)	微細な光沢を土中に含む	
47	土師器	深 口縁部	SH114					片拵ナブ	片拵ナブ	にじみ褐色 (1P19/7)	黄褐色 (1P19/6)	2mm以下の軟赤褐色を少量含む	底面 口縁の約1/4
48	土師器	深 口縁部→底面	SH14	(9.2)				片拵ナブ、黒泥	片拵ナブ	にじみ黄褐色 (1P19/7)	にじみ黄褐色 (1P19/7)	2mm以下の灰白色、暗赤赤色を土中に含む	
49	土師器	深 口縁部→底面	SH17	(7.1)				片拵ナブ	片拵ナブ	灰褐色 (1P19/6)	灰褐色 (1P19/6)	1mm以下の灰白色、暗褐色を少量含む、微細な 光沢を含む	
50	土師器	深 口縁部→底面	SH112	(13.8)	(8.7)	3.90		片拵ナブ	片拵ナブ	にじみ褐色 (1P19/7)	にじみ褐色 (1P19/7)	2mm以下の暗褐色を土中に含む、2mm以下の 暗赤褐色、暗褐色を少量含む	
51	土師器	深 口縁部	SH112					ナブ、胴部条帯	片拵ナブ	暗(1P19/6)	暗(1P19/6)	2mm以下の軟赤褐色、灰白色、透明光沢、暗 赤褐色を少量含む	
52	土師器	深 口縁部→底面	SH14	(9.4)	(6.9)	1.20		片拵ナブ	片拵ナブ	暗赤褐色 (1P19/6)	暗(1P19/6)	2mm以下の軟赤褐色、灰白色、透明光沢、暗 赤褐色を少量含む	

第6表 土器観察表

遺物番号	種類	器種	出土地	法量 (cm)			平造・調整・文様法		色澤		胎土の特徴	備考
				口径	直径	高さ	内底	外底	内面	外面		
53	黒色土器	埴 残底→底残片	SH127				横方向のナギナ 折断ナギナ	横方向のナギナ (折断ナギナ)	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	1m2以下の黄褐色土少量含む。目立った砂粒 (25%)	底面の約1/3
54	黒色土器	埴 残底	SH17				折断ナギナ(折断 ナギナ)	折断ナギナ(折断ナギナ)	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	1m2以下の黄褐色土少量含む	残底 底面の約1/3
55	黒色土器	埴 残底	SH114	(16.6)			折断ナギナ、ナギナ (ナギナ内底)	折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	2m2以下の黄褐色土、黄褐色土が若干含まれる 場合、目立った砂粒は少ない	残底 底面の約1/3 約1/3含む
56	土器	鉢 白縁部→縁部	SH58				横ナギナ、横方向の ナギナ、ナギナ	横方向のナギナ、横 方向のナギナ、 横方向のナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	1m2以下の黄褐色土、2m2以下の白色土、黄褐色土 少量含む	
58	土器	埴 底残	SH0	11.6	10.2	3.6	折断ナギナ、折断ナギナ 折断ナギナ	折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	黄褐色土少量含む	
59	土器	埴 底残	SH3				折断ナギナ 折断ナギナ	折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	1m2以下の黄褐色土、黄褐色土が若干含まれる 場合、目立った砂粒は少ない	
60	黒色土器	埴 白縁部→底残	SH3	(15.4)	5.4	6.0	横ナギナ、横方向の ナギナ、ナギナ	横方向のナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	1m2以下の黄褐色土、及び白色土が若干含まれる 場合、目立った砂粒は少ない	
61	土器	埴 底残	SH3				折断ナギナ、折断ナギナ 折断ナギナ	折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	1m2以下の黄褐色土、及び白色土、黄褐色土を含む	
63	土器	埴 白縁部→底残	SH6	(13.6)			折断ナギナ	折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	1m2以下の黄褐色土、黄褐色土が若干含まれる 場合、目立った砂粒は少ない	
64	土器	埴 残底→底残	SH	(6.6)			折断ナギナ(折断ナギナ) 折断ナギナ	折断ナギナ(折断ナギナ) 折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	2m2以下の黄褐色土、黄褐色土が若干含まれる 場合、目立った砂粒は少ない	残底 底面の約1/3
65	土器	埴 白縁部→底残	SH	(13.6)	(7.1)	3.0	折断ナギナ、折断ナギナ 折断ナギナ	折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	1m2以下の黄褐色土、黄褐色土が若干含まれる 場合、目立った砂粒は少ない	内面は黄褐色土が若干 含まれる
66	土器	埴 残底→底残	SH	(6.3)			折断ナギナ、折断ナギナ 折断ナギナ	折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	黄褐色土少量含む。目立った砂粒は少ない	残底 底面の約1/3
67	土器	埴 底残	SH	(7.5)			折断ナギナ、折断ナギナ 折断ナギナ	折断ナギナ(折断ナギナ)	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	目立った砂粒は少ない	残底 底面の約1/2
68	土器	埴 残底→底残	SH	(6.0)			折断ナギナ、折断ナギナ 折断ナギナ	折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	2m2以下の黄褐色土、黄褐色土が若干含まれる 場合、黄褐色土が若干含む	残底 底面の約1/3
69	土器	埴 白縁部→底残	SH	(12.6)	(7.5)	4.4	折断ナギナ、折断ナギナ 折断ナギナ	折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	2m2以下の黄褐色土、1m2以下の黄褐色土を含む	残底 底面の約1/3
70	土器	埴 底残	SH	(7.3)			折断ナギナ、折断ナギナ 折断ナギナ	折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	1m2以下の黄褐色土が若干含まれる。目立った砂粒 は少ない	残底 底面の約1/4
71	土器	埴 残底→底残	SH	(6.0)			折断ナギナ、折断ナギナ 折断ナギナ	折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	1m2以下の黄褐色土少量含む。2m2以下の黄褐色 土、及び白色土少量含む	残底 底面の約1/3
72	土器	埴 残底→底残	SH	(7.2)			折断ナギナ、折断ナギナ 折断ナギナ	折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	黄褐色土少量含む。目立った砂粒は少ない	残底 底面の約1/6
73	土器	埴 白縁部→底残	SH	(12.5)	(6.6)	2.3	折断ナギナ、折断ナギナ 折断ナギナ	折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	2m2以下の黄褐色土、黄褐色土が若干含まれる 場合、目立った砂粒は少ない	残底 底面の約1/2
74	土器	埴 白縁部→縁部	SH				折断ナギナ	折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	黄褐色土が若干含まれる	
75	土器	埴 白縁部→縁部	SH				折断ナギナ、黄褐色 土	折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	黄褐色土が若干含まれる	
76	土器	埴 残底→底残	SH	(6.4)			折断ナギナ、折断ナギナ 折断ナギナ	折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	2m2以下の黄褐色土少量含む。目立った砂粒は 少ない	残底 底面の約1/4
77	土器	埴 残底→底残	SH	(6.6)			折断ナギナ、折断ナギナ 折断ナギナ	折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	1m2以下の黄褐色土、及び白色土を含む。目立った砂 粒は少ない	残底 底面の約1/3
78	土器	埴 残底→底残	SH	(6.6)			折断ナギナ、折断ナギナ 折断ナギナ	折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	1m2以下の白色土、黄褐色土少量含む。目立った砂粒 は少ない	残底 底面の約1/2
79	土器	埴 白縁部→縁部	SH	(13.6)			折断ナギナ	折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	2m2以下の黄褐色土少量含む。2m2以下の 黄褐色土、褐色土、及び白色土少量含む	残底 白縁の内1/6
80	土器	埴 底残	SH	(11.5)			折断ナギナ、折断ナギナ、折断ナギナ 折断ナギナ	折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	2m2以下の黄褐色土、黄褐色土が若干含まれる 場合、目立った砂粒は少ない	残底 底面の約1/3
81	土器	埴 底残	SH	(7.1)			折断ナギナ、折断ナギナ 折断ナギナ	折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	2m2以下の黄褐色土、黄褐色土少量含む	
82	土器	埴 残底→底残	SH	(9.3)			折断ナギナ、折断ナギナ 折断ナギナ	折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	2m2以下の黄褐色土少量含む。2m2以下の黄褐色 土を含む	残底 底面の約1/4
83	土器	埴 残底→底残	SH	(6.0)			折断ナギナ、折断ナギナ 折断ナギナ	折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	2m2以下の黄褐色土が若干含まれる場合、目立った 砂粒は少ない	残底 底面の約1/3
84	土器	埴 残底→底残	SH	(6.3)			折断ナギナ、折断ナギナ 折断ナギナ	折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	1m2以下の黄褐色土少量含む	残底 底面の約1/4
85	土器	埴 底残	SH	(7.3)			折断ナギナ(折断ナギナ) 折断ナギナ	折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	2m2以下の白色土、1m2以下の黄褐色土、黄褐色 土少量含む。黄褐色土が若干含む	残底 底面の約1/4
86	土器	黄白縁部 白縁部→縁部	SH	(13.2)			折断ナギナ	折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	2m2以下の黄褐色土が若干含まれる場合、1m2以下の黄褐色 土、褐色土少量含む	
87	土器	黄白縁部 白縁部→底残	SH	(13.8)			折断ナギナ	折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	2m2以下の黄褐色土少量含む。1m2以下の黄褐色 土、褐色土少量含む	
88	土器	黄白縁部 白縁部→底残	SH	(13.6)			折断ナギナ	折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	2m2以下の黄褐色土少量含む。黄褐色 土が若干含む	
89	土器	黄白縁部 残底→底残片	SH				折断ナギナ(折断ナギナ) 折断ナギナ	折断ナギナ(折断ナギナ) 折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	2m2以下の黄褐色土が若干含まれる場合、2m2以下の黄褐色 土、黄褐色土少量含む。黄褐色土が若干含む	
90	土器	黄白縁部 残底→底残	SH				折断ナギナ(折断ナギナ) 折断ナギナ	折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	黄褐色土少量含む。目立った砂粒は少ない	
91	土器	黄白縁部 残底→底残片	SH				折断ナギナ	折断ナギナ	黄褐色 (H95/2)	黄褐色 (H95/2)	2m2以下の黄褐色土少量含む。2m2以下の黄 褐色土、黄褐色土を含む	

第7表 土器観察表

遺物 番号	種類	器種 部位	出土地帯	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	高さ	外側	内側	外側	内側		
92	土師器	高台付埴 高台	F6				刷割ナデ、ナデ	下割	黒褐色 2.5V 7/0	黒褐色 2.5V 7/0	1mm以下の暗褐色粒と黒褐色の土質粒をわずかに含む	高台径 約17cm
93	土師器	高台付埴 高台	F6				刷割ナデ	刷割ナデ後ナデ	灰白0.1Y 黒2.5	灰白0.8Y 黒2.5	1mm以下の暗褐色粒、黒褐色粒を含む	高台径 約17.3cm
94	土師器	高台付埴 高台	F7				刷割ナデ	下割	にじみ・黄褐色 0.8YR7/0	にじみ・黄褐色 0.8YR7/0	2mm以下の暗褐色色粒を少量含む、1mm以下の暗褐色粒、黒褐色土質粒、透明土質粒を含む	高台径 約16.3cm
95	黒色土師	埴 口縁部	G6				刷割ナデ	刷割ナデ後ナデ	黒灰褐色 0.8YR7/0	黒0.4YR2/1	2mm以下の暗褐色粒、黒褐色土質粒をわずかに含む	
96	黒色土師	埴 口縁部	F6				刷割ナデ	刷割ナデ	黒灰 0.8YR7/0	黒灰 0.8YR5/1	目立った赤褐色は少ない	
97	黒色土師	埴 口縁部・胴部	W8				七草(黒化赤灰)	七草(黒化赤灰)	黒灰 0.8YR5/1	黒灰褐色 0.8YR6/2	2mm以下の暗褐色色粒を含む、1mm以下の黒褐色粒を少量含む	
98	黒色土師	埴 口縁部	E3				刷割ナデ後ナデ	刷割ナデ後ナデ	灰白 0.8YR6/2	黒0.4YR2/1	目立った赤褐色は少ない	
99	黒色土師	埴 口縁部・胴部	F6				刷割ナデ後ヘラ 削ナデ	刷割ナデ後多方 削ナデ	黒灰褐色 0.8YR7/0	黒灰 0.8YR6/1	黒褐色の透明土質粒を含む	
100	黒色土師	埴 体部・底面	F7				多方向の ヘラ削ナデ	多方向のヘラ削 ナデ	にじみ・黄褐色 0.8YR7/0	にじみ・黄褐色 0.8YR7/0	1mm以下の暗褐色粒、黒褐色色粒を少量含む	
101	黒色土師	埴 体部・底面	F6		7.0		刷割ナデ後ナデ ナ、削	刷割ナデ後ナデ	黒灰褐色 0.8YR6/2	黒0.4YR2/1	目立った赤褐色は少ない	
102	黒色土師	高台付埴 高台	F6		5.9		刷割ナデ	刷割ナデ後ナデ	黒灰褐色 0.8YR6/2	黒灰 0.8YR6/1	黒褐色の土質粒をわずかに含むが、目立った赤褐色は少ない	
103	黒色土師	高台付埴 高台	E7		8.0		刷割ナデ後ナデ ナ、削ナデ	刷割ナデ後ナデ	黒灰褐色 0.8YR6/2	黒灰 0.2.5Y/1	2mm以下の黒褐色粒と黒褐色の土質粒をわずかに含む	残存 底面の約1/6
104	黒色土師	高台付埴 体部・底面	E7				刷割ナデ、七草 (黒化赤灰)	刷割ナデ後多方 削ナデ	にじみ・黄褐色 0.8YR7/0	黒0.4YR2/1	1mm以下の赤褐色粒、黒褐色色粒を少量含む、黒褐色土質粒を含む	高台径 約15.6cm
105	土師器	罎 口縁部	F4				刷割ナデ	刷割ナデ	灰黄褐色 0.8YR6/2	灰黄褐色 0.8YR6/2	黒褐色の土質粒をわずかに含む	
106	土師器	罎 口縁部・底面	F6	9.3	9.0	1.2	刷割ナデ、削 ナ、削	刷割ナデ 削ナ	にじみ・黄褐色 0.8YR7/0	にじみ・黄褐色 0.8YR7/0	1mm以下の暗褐色色粒をわずかに含む、目立った赤褐色は少ない	残存 底面の約1/4
107	土師器	罎 口縁部・底面	F6	9.3	7.2	1.4	刷割ナデ 削ヘラ削	刷割ナデ	にじみ・黄褐色 0.8YR7/0	にじみ・黄褐色 0.2.5YR7/0	1mm以下の暗褐色色粒、黒褐色粒、灰白色粒を少量含む	残存 底面の約1/4
108	土師器	罎 口縁部・底面	F6		7.0		刷割ナデ 削ヘラ削	刷割ナデ	にじみ・黄褐色 0.2.5YR7/0	にじみ・黄褐色 0.2.5YR6/0	2mm以下の暗褐色色粒を少量含む	残存 底面の約1/4
109	土師器	罎 口縁部・底面	E3	8.65	6.85	1.56	刷割ナデ、削 ナ、削、目立目削 削	刷割ナデ	にじみ・黄褐色 0.8YR7/0	にじみ・黄褐色 0.8YR7/0	2mm以下の暗褐色色粒を少量含む	口縁部形
110	土師器	罎 口縁部・底面	F6	9.0	6.5	1.5	刷割ナデ 削ヘラ削	刷割ナデ	黒灰褐色 0.2.5YR6/0	黒灰褐色 0.2.5YR6/0	2mm以下の灰白色粒、1mm以下の暗褐色色粒、黒褐色土質粒をわずかに含む	残存 底面の約1/3
111	土師器	罎 口縁部・底面	F6	7.30	7.0	1.2	刷割ナデ 削ヘラ削	刷割ナデ	にじみ・黄褐色 0.8YR7/0	黒灰 0.2.5Y/2	目立った赤褐色は少ない	残存 底面の約1/6
112	土師器	罎 口縁部・底面	F6	8.75	8.0	1.2	刷割ナデ 削ヘラ削	刷割ナデ	にじみ・黄褐色 0.2.5YR7/0	にじみ・黄褐色 0.8YR7/0	1mm以下の黒褐色粒、暗褐色色粒を含む	残存 底面の約1/4
113	土師器	罎 口縁部・底面	F6	8.25	8.0	1.1	刷割ナデ 削ヘラ削	刷割ナデ	黒0.5YR6/0	黒0.5YR6/0	2mm以下の暗褐色色粒を含む、1mm以下の灰白色粒をわずかに含む	残存 口縁の約1/8
114	土師器	罎 口縁部・底面	E7	8.50	8.0	1.15	刷割ナデ 削ヘラ削	刷割ナデ	黒灰褐色 0.2.5YR6/0	黒灰褐色 0.2.5YR6/0	2mm以下の灰白色粒、黒褐色土質粒、暗褐色色粒を含む	残存 底面の約1/5
115	土師器	罎 口縁部・底面	F6	16.0			黒化赤い	黒化赤い	黒0.5YR6/0	黒0.2.5YR6/0	1mm以下の暗褐色粒、黒褐色色粒、透明土質粒を含む	
116	土師器	罎 口縁部・底面	E7	28.2			刷割ナデ、削 ヘラ削ナデ(黒化)	刷割ナデ(黒化)	黒0.5YR6/0	黒0.5YR6/0	2mm以下の暗褐色粒、黒褐色色粒、透明土質粒を含む	
117	土師器	罎 口縁部・底面	E7				刷割ナデ、削 ナ、削	刷割ナデナ 削ナ	にじみ・黄褐色 0.2.5YR7/0	にじみ・黄褐色 0.2.5YR6/0	2mm以下の暗褐色色粒を少量含む、1mm以下の赤い赤褐色色粒を含む、黒褐色土質粒を少量含む	
118	土師器	罎 口縁部	E3	26.3			刷割ナデナ 削ナ(黒化赤灰)	刷割ナデナ、ヘラ 削ナ(黒化赤灰)	黒0.2.5YR7/0	にじみ・黄褐色 0.2.5YR7/0	1mm以下の赤褐色色粒を含む、1mm以下の灰白色粒、黒褐色色粒、灰褐色土質粒を含む	
119	土師器	罎 口縁部	E7				刷割ナデナ	刷割ナデナ 削ナ	黒0.2.5YR6/0	黒0.2.5YR6/0	1mm以下の黒褐色粒と黒褐色土質粒をわずかに含む	
120	土師器	罎 口縁部	G6	27.0			刷割ナデナ	刷割ナデナ	黒0.5YR6/0	黒0.5YR6/0	2mm以下の透明土質粒を少量、2mm以下の黒褐色土質粒をわずかに含む	
121	土師器	罎 体部・底面	E7				多方向のヘラ削 削ナ、削	刷割ナデナ、削 削ヘラ削ナ、削 削	黒0.5YR6/0	黒0.5YR6/0	1mm以下の暗褐色粒、灰白色粒を含む	残存 胴部底の約1/8
122	土師器	罎 体部	E7				カキ削、平行ヘ ラ削	削ナ	黒0.5YR6/0	にじみ・黄褐色 0.2.5YR7/0	2mm以下の黒褐色粒と1mm以下の透明土質粒をわずかに含む	
123	土師器	罎 口縁部	G6	28.2			刷割ナデナ	刷割ナデナ	黒0.2.5YR6/0	にじみ・黄褐色 0.2.5YR6/0	2mm以下の暗褐色粒、透明土質粒を少量含む、2mm以下の暗褐色色粒をわずかに含む	
124	土師器	罎 口縁部・底面	F6				刷割ナデナ	刷割ナデナ、削 削ヘラ削ナ	黒0.5YR6/0	黒0.5YR6/0	2mm以下の暗褐色色粒をわずかに含む、2mm以下の灰白色粒をわずかに含む	
125	土師器	罎 口縁部・底面	E7	29.2			刷割ナデナ	刷割ナデナ、削 削ナ	黒0.2.5YR6/0	黒0.2.5YR6/0	2mm以下の灰白色粒、暗褐色色粒をわずかに含む、黒褐色土質粒をわずかに含む	
126	土師器	罎 口縁部・底面	F6				刷割ナデナ	多方向のヘラ削 削ナ、削	黒0.5YR6/0	黒0.5YR6/0	2mm以下の灰白色粒を少量、1mm以下の黒褐色をわずかに含む、黒褐色土質粒を含む	
127	土師器	罎 口縁部・底面	E7	27.0			刷割ナデナ	刷割ナデナ、削 削ヘラ削ナ	黒0.5YR6/0	黒0.5YR6/0	2mm以下の灰白色粒、暗褐色色粒、黒褐色土質粒をわずかに含む	残存 口縁の約1/5
132	灰褐色 土師器	罎 体部	E3				削ナ	削ナ	灰白0.5Y/1	灰白0.5Y/1	暗い 暗褐色	

第8表 製塩土器・土製品観察表

遺物番号	種類	器種・部位	出土地点	位置(cm)			手法・調整・文様ほか	色相		胎土の特徴	備考
				口径	底径	高さ		内面	外面		
128	土師器	製塩土器 白磁器	G6				ナブ	本日焼	焼(5YR7/4)	焼(5YR7/4)	5mm以下の褐色結晶、黒緑な光沢を帯びておらずに含む
129	土師器	製塩土器	F5				ナブ	本日焼	焼(7.5YR7/4)	焼(7.5YR7/4)	6mm以下の褐色色結晶を多量に含む
130	土師器	製塩土器 陶器	F7				灰土質しい ナブ(灰土質)	本日焼 (灰土質)	明赤褐色(5Y 8/5)	焼(5Y 8/5)	6mm以下の褐色結晶を多量に含む。0.5mm以下の黄色灰粒、透明灰粒を帯びておらずに含む。赤緑な光沢を帯び、凹凸は、透明な光沢を多量に含む。
131	土師器	製塩土器 陶器	G6				ナブ	本日焼	二色・赤褐色(5Y 8/5)	焼(5Y 8/5)	5mm以下の二色・赤褐色結晶を多量に含む。1mm以下の赤褐色結晶、二色・赤褐色結晶、灰白色結晶を多量に含む。
143	土師器	製塩土器 陶器～灰土質	F6				同前～ナブ	同日焼	二色・赤褐色(5Y 8/5)	焼(5Y 8/5)	1mm以下の赤褐色結晶、赤褐色結晶を多量に含む。また、目立つ赤褐色結晶が多い。

第9表 陶磁器観察表

遺物番号	種類	器種・部位	出土地点	位置(cm)			手法・調整・文様ほか	色相		胎土の特徴	備考	
				口径	底径	高さ		内面	外面			
57	白磁	網 白磁器～灰土質	SM1	15.7	7.0	6.6	無釉、磨製、回転 ナブ、回転～ナブ	無釉、1隻の成器	灰白(5Y 8/1)	灰白(5Y 8/1)	黒丸	焼成・窯跡 青土層
62	白磁	網 白磁器	SC3				無釉、貫入	無釉、貫入	灰白(5Y 8/1)	灰白(5Y 8/1)	黒丸	焼成・窯跡 大寺の分館白磁器 付随品に属する
133	白磁	網 白磁器～赤土質	F6				無釉	無釉	灰白(5Y 8/1)	灰白(5Y 8/1)	黒丸	焼成・窯跡 大寺の分館白磁器 付随品
134	白磁	網 白磁器～赤土質	F7				無釉	無釉	灰白(5Y 7/1)	灰白(5Y 7/1)	黒丸	焼成・窯跡 大寺の分館白磁器 付随品
135	白磁	網 白磁器	F7				無釉	無釉	灰白(5Y 7/1)	灰白(5Y 7/1)	黒丸	焼成・窯跡 大寺の分館白磁器 付随品
136	白磁	網 白磁器～赤土質	F7				無釉、貫入	無釉、貫入	灰白(5Y 8/2)	灰白(5Y 8/2)	黒丸	焼成・窯跡 大寺の分館白磁器 付随品
137	白磁	網 白磁器	F6				無釉	無釉	灰白(5Y 7/1)	灰白(5Y 7/1)	黒丸	焼成・窯跡 大寺の分館白磁器 付随品
138	白磁	網 白磁器	F7				無釉、貫入	無釉、貫入	灰白(5Y 7/2)	灰白(5Y 7/2)	黒丸	焼成・窯跡 大寺の分館白磁器 付随品
139	白磁	網 白磁器	F6				無釉	無釉	灰白(5Y 8/1)	灰白(5Y 8/1)	黒丸	焼成・窯跡 大寺の分館白磁器 付随品
140	白磁	網 白磁器～赤土質	F6				(7.4)	無釉、磨製、回転 ナブ、貫入	灰白(5Y 7/2)	灰白(5Y 7/2)	黒丸	焼成・窯跡 大寺の分館白磁器 付随品
141	白磁	網 白磁器	F6				無釉、貫入	無釉、貫入	灰白(5Y 8/2)	灰白(5Y 8/2)	黒丸	焼成・窯跡 大寺の分館白磁器 付随品に属する
142	青磁	網 白磁器	F6				磁器的な文 ナブ、貫入	無釉、貫入	灰白(5Y 7/2)	灰白(5Y 7/2)	黒丸	焼成・窯跡 大寺の分館白磁器 青磁付随品

第10表 石器・石製品計測表

遺物番号	器種	出土Gr.	石材	遺構・層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)
22	石鏃	E4	黒曜石(腰岳産)	-	27	14	4	1
23	石鏃	C7	黒曜石(腰岳産)	VIIa	19	16	3	0.6
24	石鏃	C6	ガラス質安山岩	VIIa	19	11	3	0.5
25	二次加工剥片	C7	緑色頁岩	VIIa	18	22	10	34
26	打製石斧	C6	ホルンフェルス	VIIa	47	49	13	42.8
27	打製石斧	B8	ホルンフェルス	VIIa	105	75	17	130.1
28	スクレイパー	E6	凝紋岩	VI	46	35	7	10.3
29	スクレイパー	D5	頁岩	-	46	63	9	34.8
30	スクレイパー	D6	砂岩	-	101	135	24	421
31	礫石	C7	砂岩	VIIa	43	38	28	61.2
32	礫石器	C6	砂岩	VIIa	77	89	33	307.5
33	台石	B8	砂岩	VIIa	159	196	43	2000
41	石鏃	F6	頁岩	VI	51	24	5	6.5
42	礫石	B8	砂岩	VIIa	265	106	90	4300
43	礫石	C7	砂岩	VIIa	219	99	94	2150
144	石鏃	E6	滑石	VI	63	43	16	59.8
145	石鏃	E6	滑石	VI	26	76	16	54

第11表 鉄器計測表

遺物番号	器種	出土Gr.	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
146	刀子	F7	2.6	3.5	0.3	4.3
147	椀形鍛冶滓	E6	7.9	5.4	2.6	114.7
148	椀形鍛冶滓	F6	5	4.1	3.6	84.5
149	椀形鍛冶滓	E7	4.5	2.9	1.85	27.1
150	鉄塊系遺物	F7	4.8	2.2	1.5	20.8
151	鉄塊系遺物	F7	4.1	2	1.3	14.9
152	鉄滓	F6	3	2.2	1.6	19.3
153	鉄滓	F7	3.1	2.2	2	22.5



## 第四章 総括

大浦遺跡の発掘調査では、縄文時代・弥生時代・古代・中世の遺構や遺物の存在が確認された。これらの遺構や遺物は、当地やその周辺域において、連続として続いてきた人々の日々の営みを今に語りかけてくることは言うまでもない。そこで本章では、遺構と遺物からみた各時代の様相について若干の考察を加えることで、まとめたい。

### 第1節 縄文時代

大浦遺跡では、縄文時代早期、後期～晩期の遺物や遺構の存在が確認された。縄文時代早期については、遺構は検出されず、縄文土器の小破片のみの出土であったが、土器片それ自体は、調査地周辺に当該期の遺物包含層や遺構の存在を示唆するものである。

今回の発掘調査における大きな成果の一つとして、縄文時代後期の集落跡の発見がある。堅穴建物跡(SA1)は、一辺の長さが4.2～4.6mを測る不整な方形プランで、柱穴は建物床面の中心にあたる位置に1つと壁際に沿って円形に小穴列が等間隔に巡る配置であった。出土遺物は、柴畑光博氏による再検討がなされた「中岳Ⅱ式土器」(柴畑1989)に相当する縄文土器深鉢片(第10図3～6)である。小破片資料であるため、柴畑氏の細分類との対比関係はとれないが、概ね縄文時代後期後葉に位置づけられるもので、SA1もその時期と考えられる。また、遺物包含層その他からは宮ノ迫式土器や黒川式土器の深鉢・浅鉢も出土していることから、SA1の時期を前後する後期前葉および晩期前半代にも活動の痕跡を読み取ることができる。

都城盆地では縄文時代後期になると、集落遺跡は盆地全体に分布を拡大するようである(都市教委2015)。近年では、大浦遺跡の所在する盆地南縁部(天ヶ峰山麓)においても嫁坂遺跡(宮崎県埋蔵文化財センター2019)の調査によって、縄文時代後期～晩期の集落跡の存在が明らかとなった。嫁坂遺跡では宮ノ迫式(B区)と中岳Ⅱ式・入佐式(C区)の堅穴建物が検出されている。

このように大浦遺跡・嫁坂遺跡の調査成果から推察すると、盆地南縁部、特に天ヶ峰山麓周辺においては縄文時代後期前葉(宮ノ迫式土器)と後期後葉～晩期初頭(中岳Ⅱ式・入佐式土器)に集落形成の画期を見出すことが可能であるが、集落構造も含めた調査事例の比較検討等については今後の課題としておきたい。

### 第2節 弥生時代

今回の調査では当該期の遺構そのものは検出されなかったが、弥生土器や石器が遺物包含層等から出土した。特に甕(第14図36)は貼付口縁と突帯を持つ大型品であり、型的な特徴から加賀淳一氏の「大型甕3型式」(加賀2014)に相当し、編年的には「5期」(弥生時代中期後半段階)に位置づけられる資料である。なお、この大型甕は簡単には持ち運びはできない法量と重量であるため、調査区外に集落または生産基盤に関する遺構が存在する可能性を示す遺物と考えられる。

一方、大浦遺跡の範囲のうち、東縁にあたる内山地区での発掘調査(都市教委1997)では、山之口式土器や中溝式土器が出土した堅穴建物跡1軒が検出されており、大浦遺跡でも南端部における発掘調査となった今回の調査成果も踏まえると、遺跡全体に弥生時代中期後半～後期前半の遺物や遺構が包蔵されている可能性が高いとみられる。

### 第3節 古代～中世

今回の調査では、古代～中世の遺物とともに掘立柱建物跡7棟、周溝墓1基、土坑7基および無数の小穴が検出された。本節では、これら遺構の所属時期や時期的変遷および性格等について考察することでまとめたい。まず、出土遺物、特に多く出土した土師器類を対象に先行研究に基づいた年代的位置付けをはかり、そこから得られた年代観等から各遺構の時期を検討していくことにしたい。

#### (1) 遺物の検討

**包含層出土遺物の時期** 遺物包含層のVI層中から土師器・黒色土器・須恵器・製塩土器・中国産磁器(白磁・青磁)・石器・鉄器および鍛冶関連遺物が出土した。そのうち最も多く出土したのは土師器・皿類であるが、その多くは破片資料であり、遺構ごとあるいは器形や法量ごとに分類を試みても、土器そのものの変遷を探るのは困難である。そこで、都城盆地を対象にした先行研究の成果と比較検討することで年代的位置付けを行いたい。都城盆地を対象とした古代～中世にかけての土師器編年は、柴畑光博氏や近沢恒典氏、山下大輔氏らによって、遺跡(遺構)出土資料を基礎とし、共存する陶磁器や鉄器の年代観を緩用しつつ体系的な構築がなされてきた。

今回の調査で出土した土師器のうちの、大浦遺跡の土師器Ⅰ類(第23図63～65)は、都市馬渡遺跡の「馬渡Ⅲ群」(柴畑2004)、「江内谷遺跡SD02段階」(近沢2011)真米田遺跡の「Ⅳ期」(山下2014)に相当するものと考えられ、9世紀末～10世紀初頭に位置づけられる。Ⅱ類(66～69)は「江内谷遺跡SD01段階」(近沢2011)、真米田遺跡「Ⅴ期」の資料群と対応するため、10世紀前半、Ⅲ類(70～73)は真米田遺跡「Ⅵ期・Ⅶ期」に対応し、10世紀中頃～後半となる。Ⅳ類(74～78)は、柴畑氏の「一括資料②」(松原地区Ⅳ遺跡4号土坑墓出土品など)の補充資料である牟田ノ上遺跡1号溝状遺構出土の坏(柴畑2004)に類似することから12世紀前半～中頃に位置づけられる。Ⅴ類(79～85)は、柴畑氏の「一括資料④・⑤」に対応関係がとれ、12世紀末～13世紀中頃の時期幅でとらえられる。

さらに、土師器高台付塊(第24図86～94)は、真米田遺跡「Ⅳ期」に対応がとれ、土師器Ⅰ類とセット関係をなす。黒色土器(95～104)は、真米田遺跡の「Ⅵ期・Ⅶ期」資料に相当し、土師器Ⅲ類とセット関係にあると考えておきたい。

また、土師器皿(105～114)については、柴畑氏の「一括資料④・⑤」に類似することから、土師器Ⅴ類とセットとなる器種構成と考えられ、12世紀末～13世紀中頃の資料とみられる。

土師器甕・鉢類(第25・26図115～127)は口縁部の形態と屈曲の度合いから、大きく112～115と123～127に区分される。これに土師器の年代観との整合性および古代における土師器甕の編年(今塩屋2011)を考慮するならば、9世紀末～10世紀初頭段階(112～115)と10世紀前半～後半段階(123～127)に位置づけておきたい。その他、白磁碗・皿(第26図133～141)は、大宰府編年(太宰府市教委2000)に拠れば11世紀後半～12世紀前半、青磁碗(142)は13世紀前半頃とみられる。

このように、遺物包含層出土の土師器・磁器について年代観を整理した結果、9世紀末～10世紀後半、12世紀前半～中頃、12世紀末～13世紀中頃という3つの画期を見出すことができる。その他、製塩土器(128～131)は古代(9～10世紀)、須恵器(132)は9世紀代、石鍋(144・145)は部分資料であるが、およそ11～13世紀代(木戸1995)とみられ、土師器等の年代観と概ね合致する。

なお、鉄器や鍛冶関連遺物については、それ自体から年代を推定するのは困難である。ただし、包含層遺物から推測すると、9世紀末～10世紀後半もしくは12世紀～13世紀中頃のいずれかの時期を与えられよう。

**遺構出土遺物の時期** 遺構からも土師器や黒色土器、白磁類が出土した。第4号掘立柱建物跡(SB4)の出土土器(第17図44～46)のうち、遺構の時期に近いものは土師器皿(45)である。底部調整はヘラ切りという違いはあるが、器形や口径から栗畑氏の中世土師器編年における「一括資料④」(牟田ノ上遺跡53号土坑出土品など)に相当するとみられ、12世紀末～13世紀前半頃に位置づけられる。

掘立柱建物跡以外の小穴(SH)出土土器(第19図47～56)は、9世紀末～13世紀中頃の時期幅でとらえられる。1号周溝墓(SM1)からは、白磁碗(第20図57)と土師器坏(58)が墓壙内で共伴して出土している。白磁碗は大宰府編年IV-1a類(太宰府市教委2000)で11世紀後半～12世紀前半の幅でとらえられる資料であり、土師器坏は栗畑氏の「一括資料②」(貴船寺跡3号溝状遺構出土品)と対応関係がとれるので12世紀前半～中頃と位置づけられる。土坑(SC)のうち、SC1出土の土師器坏(第22図59)、SC3の黒色土器碗(60)、SC5の白磁皿(62)がある。このうち、60は真米田遺跡の「VI期・VII期」(都城市教委2014)資料に類似品があることから10世紀中～後半、62は大宰府編年白磁皿VI類ないしVII類に相当することから、11世紀後半～12世紀前半にかけての資料である。

## (2) 遺構の検討

**掘立柱建物跡の分類** 掘立柱建物跡は7棟分(SB1～SB7)を認めることができた。掘立柱建物の構成は一面庇付の総柱建物跡(SB3:2間×2間)、庇のない側柱建物跡(SB1・2・5・6:2間×3間、SB4・7:2間×2間)で身舎面積は10.4㎡～25.6㎡であった。これら掘立柱建物跡は、建物の主軸や桁行方向および柱穴埋土に着目すると、大きく4つの建物群や建物にグルーピングすることが可能である。

[A群] SB2・SB4・SB5の3棟で構築されるグループ

3棟ともに主軸方向がほぼN-45°-Wであり、SB2とSB4の北東側桁列がほぼ直線上に配置されている。SB2が中心的建物であり、SB4・SB5が付随する建物であると考えられる。

[B群] SB3・SB6の2棟で構築されるグループ

主軸方向がほぼN-45°-Wであり、やや離れているもののSB3とSB6の北東側桁列がほぼ直線上に配置されている。SB3の総柱掘立柱建物跡を主殿的な建物と考え、SB6が付随する建物であろう。

[C(群)] SB1の1棟

主軸方向がN-30°-Wと他とは多少の違いがみられ、埋土もこのSB1のみ埋土Aである。遺物がなく、切り合い関係もないため、時期決定等には至らないが他とは違う時期の可能性はある。

[D(群)] SB7の1棟

主軸方向がN-10°-Wと他とは大きな違いがみられる。身舎面積も小ぶりであると予想される。

**掘立柱建物跡の時期** 前項でグループ化した4群の掘立柱建物の時期を確立するにあたっては、以下の5つの視点に着目して検討する。

- ① 柱穴埋土に桜島文明軽石(Sz-3)を含まないことから、15世紀後半よりは遡ること
- ② 柱穴は遺物包含層(VI層)中、またはV・VI層を掘り込むことから、9世紀末～10世紀後半、12世紀前半～中頃、12世紀末～13世紀中頃のいずれかの可能性が高いこと
- ③ SB4(A群)出土遺物(土師器皿)の時期は12世紀末～13世紀中頃に位置づけられること
- ④ SB2(A群)の柱穴は1号周溝墓の周溝を切ること
- ⑤ 掘立柱建物群の柱穴埋土(黒褐色土系統)は墓壙・周溝の埋土(黄褐色系統)とは異なることすなわち、掘立柱建物A群はSM1よりも後出する12世紀末～13世紀中頃までの時期幅で位置づけ

られる。またB群はA群の主軸方向も同一で埋土も同種であることから、A群の前後する時期に建てられたと考えておきたい。またC(群)は等高線に対して大きく斜交する建物主軸で、柱穴埋土はA・B、C(群)とも異なるものの、身舎規模はA群のSB2と同等であるため、A・B群よりは古い建物跡と考えられる。Dは、C(群)と同様に建物主軸が等高線と斜交するが柱穴埋土はA・B群のものに類似する。根拠に乏しいが、A・B群よりは後出する建物跡としておきたい。

このように、掘立柱建物跡は、SB1(C)→SB2・SB4・SB5(A群)SB3・SB6(B群)→SB7(D)への変遷、すなわち調査区の北西側から南東側への建物群の移動を想定することができる。これら掘立柱建物の開始期は不明確ではあるものの、少なくとも12世紀末～13世紀中頃までの間に営まれていたといえる。多数検出された土坑は掘立柱建物群に付随するものと考えられる。当然のことながら、あくまでも現地ないし、図上にて復元された掘立柱建物跡を対象として検討した結果であって、調査区内に9世紀末～10世紀後半、12世紀前半～中頃の掘立柱建物跡が存在した可能性を排除するものではない。

他方、都城市域における中世期の掘立柱建物跡については、外山・原田氏によって、集成と類型化が試みられている(外山・原田2004)。この先行研究において、都城市の中世期の掘立柱建物跡は、

I類…身舎の柱穴が側柱のみの掘立柱建物跡

II類…身舎の柱穴を側柱とその内側に持つが、いわゆる総柱にはならない掘立柱建物跡

III類…身舎の柱穴が側柱と内側すべてに配置されるいわゆる総柱掘立柱建物跡

の3つに区分されるとした。大浦遺跡の掘立柱建物跡は、外山・原田氏の「I類」に相当するものが6軒、「III類」は1軒となる。また、建物規模は2間×3間が主体的であること、身舎面積も15㎡～27㎡が一番多いという指摘も同調的である。

よって、今回の調査で検出された掘立柱建物跡は、中世前半期(12世紀末～13世紀中頃)における都城市域の一般的な集落という性格を与えることができる。

**周溝墓** 今回の発掘調査では円形周溝墓(SM1)が検出された。副葬品である白磁碗と土師器杯の年代視から12世紀前半～中頃の間には埋葬されたものと考えられる。古代から中世期における周溝墓は、宮崎県下において管見の限りでは本例で11例目となる(第12表・第28図)。

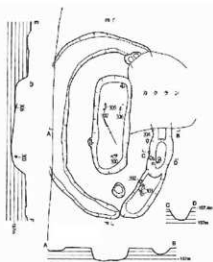
第12表 宮崎県内で確認された古代～中世周溝墓一覧

遺跡名	所在地	検出数	時期	遺構の概要
下北方花切 第2遺跡	宮崎市下北方町花切	1	10c中頃～ 後半	墓壇 黒色土器埴
				周溝 土師器杯、黒色土器埴、酒器器杯、鉄釘
前原西遺跡	宮崎市清武町大字本原字山内	1	14～15c	墓壇 土師器杯、皿、銭貨、漆器
平原遺跡	えびの市大字東川北字平原	1	10c中頃～ 後半	墓壇 土師器皿、高台付埴
				周溝 土師器埴・杯・皿・埴、黒色土器、布直土器
小窪下遺跡	えびの市大字末永字上田代	1	10c頃	周溝 土師器皿
真米田遺跡	都城市高城町地溝坊	1	9c後半～ 10c代	周溝 土師器杯・円盤高台杯・埴・皿
				酒器器埴、鉢輪陶器、鉄釘、軽石製笠石
池ノ友遺跡	都城市早水町	1	11c前半	墓壇 土師器皿、刀子、鉄製工具、紙石
				周溝 土師器埴・杯・皿・埴、黒色土器、布直土器
池島遺跡	都城市早水町	1	12c前半～ 中頃	墓壇 刀子
				周溝 土師器皿
筆無遺跡	都城市今町	3	10c中頃～ 後半	1号墓壇 土師器埴
				2号墓壇 土師器 2号周溝 土師器
				3号墓壇 土師器・高台付埴 3号周溝 土師器鉢
大浦遺跡	都城市梅北町	1	12c前半～ 中頃	墓壇 白磁碗、土師器杯

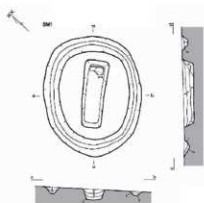
※2019年12月現在



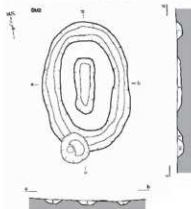
真米田遺跡



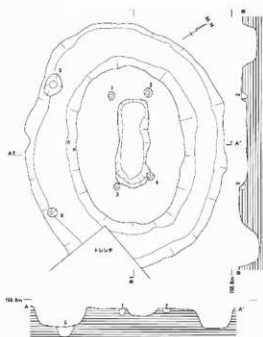
池ノ友遺跡



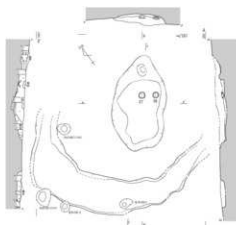
筆無遺跡 SM1



筆無遺跡 SM2



池島遺跡



大浦遺跡

0 2m  
1/100

第28図 都城盆地における主な古代～中世周溝墓 (S=1/100) ・各報告書より転載

これらの周溝墓は、約2.4 m×0.8 mや約1.5 m×0.5 mを測る規模の短冊形の墓壇と楕円形を基調とする周溝を巡らせるもので、周溝の外径は大型(約6.4 m×5.4 m)・中型(約4.9 m×3.2 m)・小型(約3.4 m×2.2 m)のものがある。

現時点では、真米田遺跡(9世紀後半～10世紀前半)が最古例で、前原西遺跡例(14～15世紀)まで、墓制の一種として存続するようである。分布は宮崎平野部・加久藤盆地・都城盆地にあり、特に都城盆地での事例が多いことに注目される。

12世紀前半代に位置づけられる大浦遺跡例(SM1)規模は、池島遺跡例に匹敵するもので中型の部類に入る。12世紀前半代、また、白磁碗の副葬という点でも注目されるが、墓壇や周溝の平面形は他に比べてかなり不整形であることには留意される。

### (3) 遺跡の変遷とその性格

古代でも後半期にあたる9世紀末～10世紀後半段階では、明確な遺構は見出しがたいが、調査区内では遺物包含層(VI層)の形成が進んでいることから、調査区内もしくは周辺に集落本体が存在した可能性は高い。調査区外の候補地としては、調査区西側の平坦面または北側に広がる一段高い丘陵地を挙げることができる。11世紀代は遺構や遺物とも皆無で、遺跡形成の空白期とも呼べる時期である。12世紀前半～中頃には円形周溝墓(SM1)が造営され、墓地としての性格を帯びる。その後、12世紀末～13世紀中頃には都城盆地では一般的な掘立柱建物主体の中世集落という性格へと変化を遂げる。

堀田孝博氏によると、10世紀後半～11世紀中頃における宮崎県下の円形周溝墓は「おそらく佐賀平野に本拠を有し、大宰府とも関係を持ちえた有力者とその一族」の墓制とみている(堀田2010)。

大浦遺跡の円形周溝墓(SM1)は12世紀代に位置づけられるものであるが、前代における人々の移動と地域社会での活動交流などが、造営基盤の前提であったと理解できる。すなわちSM1の被葬者は、中国産白磁を入手でき、かつ特異的な墓制を採用しえた大浦遺跡周辺における有力者層の一員であったとみられる。堀田氏が指摘しているように「都城盆地は交易活動における九州島と南島世界の境界・接点」であること、さらには、島津庄に象徴される耕地開発と発展が、大浦遺跡における円形周溝墓と集落出現の背景であったと考えておきたい。

なお、12世紀後半段階は、空白期となることからSM1の造営以後も墓地という性格が継続していたものとみられる。さらに、13世紀後半までには集落は廃絶したものと考えられ、そのまま耕地化して現在に至ったものといえる。

## 第4節 ～おわりに～

以上、大浦遺跡の調査で確認できた遺構・遺物について時代ごとに考察を試み、まとめしたが、すべての遺構・遺物についての詳細な検討を加えることはできなかった。しかしながら、鹿児島県曾於市から都城市へと流れ下る大淀川上流域に展開した大浦遺跡は縄文時代・弥生時代・古代・中世の各時代における人々の営みを垣間見せてくれた。なかでも古代末から中世前半期の遺構・遺物は、この地に生きた人々の姿を映し出すとともに、都城盆地における当該期の地域的様相を考えるうえで大きな手掛かりとなるであろう。今後の周辺地域の調査成果の蓄積により、遺跡や史跡等の関係がより明らかなものとなることを期待するものである。

## 引用・参考文献

- 今嵐屋毅行 2011「日向国における古代前期の土師器窯とその様相」『古文化談叢』第65集 九州古文化研究会  
えびの市教育委員会 2002『小路下遺跡』えびの市埋蔵文化財調査報告書第32集
- 加寛 淳一 2014「都城盆地における弥生時代中期から後期前葉の土器様相」『Archaeology From the South II』  
新田栄治先生退職記念事業会
- 木戸 雅寿 1995「13. 石鍋」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 柴畑 光博 1989「中岳Ⅱ式土器の再検討—東南部九州におけるある縄文土器の型式組列—」『鹿児島考古』  
第23号 鹿児島県考古学会
- 柴畑 光博 2004「都城盆地における中世土師器の編年に関する基礎的研究(1)」『宮崎考古』第19号 宮崎  
考古学会
- 外山 隆之・原田亜紀子 2004「都城市における中世掘立柱建物跡の類型化」『宮崎考古』第19号 宮崎考古学会
- 二宮 満夫 2006「宮崎県出土の滑石製石鍋」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第2号 宮崎県立西都原  
考古博物館
- 近沢 恒典 2011「都城盆地の古代土師器の編年について」『平成23年度埋蔵文化財担当専門職員研修会』宮崎  
県埋蔵文化財センター
- 広島県立歴史博物館 1998「草戸千軒町遺跡出土の滑石製石鍋」『草戸千軒町遺跡調査研究報告』2
- 堀田 孝博 2010「物の動きからみた都城盆地の境界性—古代後半期の陶磁器類を中心として—」『南九州の地  
域形成と境界性』地方史研究協議会
- 堀田 孝博 2016「宮崎平野部の中世土師器」『宮崎県央地域の考古資料に関する編年的研究』II 宮崎考古学会
- 都城市教育委員会 2000『池ノ友遺跡』都城市文化財調査報告書第49集
- 都城市教育委員会 2000『郡元地区遺跡群』都城市文化財調査報告書第51集
- 都城市教育委員会 2004『馬渡遺跡』都城市文化財調査報告書第62集
- 都城市教育委員会 2014『真米田遺跡・七日市前遺跡』都城市文化財調査報告書第111集
- 都城市教育委員会 2015『おどろくべき！九州の縄文文化』
- 宮崎市教育委員会 2015『下北方花切第2遺跡』宮崎市文化財調査報告書第106集
- 宮崎県教育委員会 1988『前原西遺跡』宮崎学園都市遺跡調査報告書第4集
- 宮崎県教育委員会 1994『平原遺跡』九州縦貫自動車道建設工事にともなう埋蔵文化財調査報告書2
- 宮崎県埋蔵文化財センター 1999『西下本庄遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第15集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2004『池島遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第84集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008『筆無遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第166集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008『大島畠田遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第178集
- 山下 大輔 2012「都城盆地内の奈良・平安時代の遺跡概観」『国指定10周年記念シンポジウム大島畠田遺跡の  
時代を語る—島津荘成立以前の都城盆地の動向—』都城市教育委員会
- 山下 大輔 2014「第5章 真米田遺跡の調査のまとめ」『真米田遺跡・七日市前遺跡』都城市文化財調査報告  
書第111集 都城市教育委員会
- 山本信夫編 2000「大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—」『太宰府市の文化財』第49集 太宰府市教育委員会
- 吉本 正典 2012「黒川式土器の歴史的的位置」『九州考古学』第87号 九州考古学会



大浦遺跡遠景（調査区南から天ヶ峰、金御岳を望む）





大浦遺跡調査区全景（上が北側）



調査区北東側土層堆積状況（I層～VI層）



南東側土層堆積状況（I層～VII層上面）



南東側土層堆積状況（I層・II層・VII層・VIII層・IX層上面）



北西側土層堆積状況（I層、X層～XII層）



XII層より下層の土層堆積状況（シルス層）

図版 4



SA1 検出状況 (南東より)



SA1 検出位置 (南より)



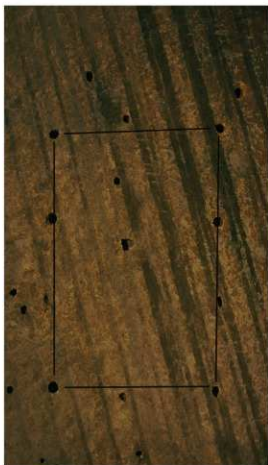
SA1 土層堆積状況 (北より) ※ピンポールの高さは約0.9m



SA1 完掘状況 (東より)



掘立柱建物跡・土坑検出状況（調査区北側 南東より）



SB1 完掘状況



SM1・SB2～SB5 完掘状況

図版 6



柱穴埋土A (SB1)



柱穴埋土B (SB2)



SC3 検出状況



SC3 半截状況



SC4・5 半截状況



土師器皿 (109) 出土状況



作業風景 (2018. 夏)



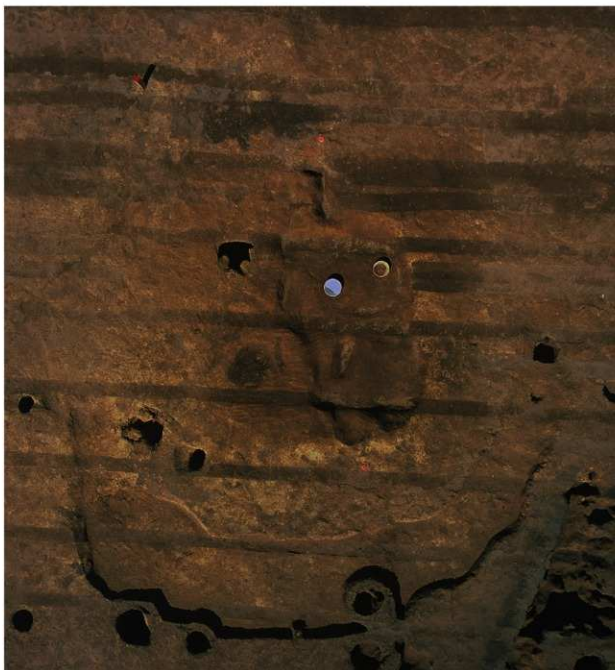
作業風景 (2018. 初秋)



SM1 墓壇検出（西より）



SM1 墓壇内遺物出土状況（南東より）



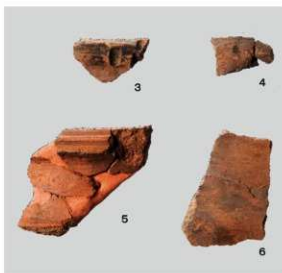
SM1 完掘状況（垂直方向より）



縄文土器（早期）



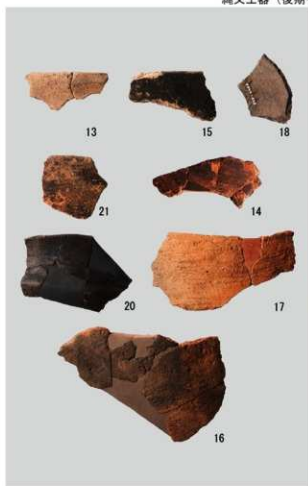
縄文土器（後期）



SA1 出土遺物



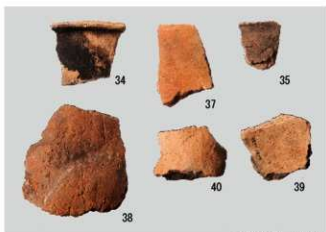
縄文土器（後期～晩期）[1]



縄文土器（後期～晩期）[2]



縄文時代の石器



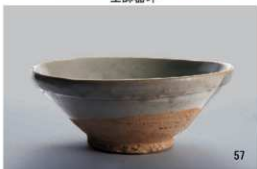
弥生土器（中期～後期）



弥生時代の石器



土師器坏



白磁碗



SM1・SB4・小穴群・土坑出土遺物



土師器坏



黒色土器碗





土師器環 (Ⅰ類・Ⅱ類)



土師器環



土師器環



土師器環 (Ⅲ類・Ⅳ類)



土師器環 (Ⅴ類)



土師器高台付塊



黑色土器碗 (内面)



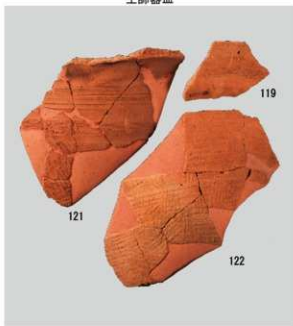
黑色土器碗



土師器皿



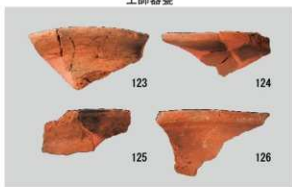
土師器皿



土師器甕



土師器甕



土師器鉢



土師器鉢

127



製塩土器・紡錘車

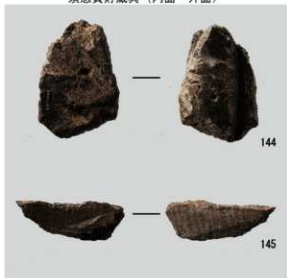


須恵質貯蔵具（内面・外面）

132



白磁・青磁



滑石製石鍋（内面・外面）

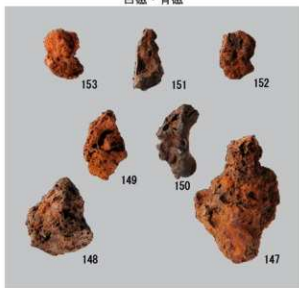
144

145



刀子

146



鉄器・鍛冶関連遺物

153

151

152

149

150

148

147

報告書抄録

ふりがな	おおouraいせき							
書名	大浦遺跡							
副書名	県道飯野松山都城線（都城志布志道路）金岳岳工区道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第 253 集							
編著者名	高村 哲・今塩屋毅行（下線部が編集者）							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0812 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地 TEL. 0985-36-1171							
発行年月日	西暦 2020 年 3 月 25 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
おおouraいせき 大浦遺跡	みやざきけん 宮崎県 みやこのじょうし 都城市 うめきたちよう 梅北町 ばんちごう 10792番地2号ほか	45202	7017	31度 38分 38秒 付近	131度 3分 40秒 付近	2018.7.9 ～ 2018.10.26	約1,600㎡	記録 保存 調査
	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
	集落跡	縄文時代 後期～晩期 弥生時代 古代～中世	竪穴建物跡 周溝墓 掘立柱建物跡 土坑	1基 1基 7棟 7基	縄文土器・石器 弥生土器・石器 土師器 黒色土器 白磁・青磁・鉄器	縄文時代の遺構は、竪穴建物跡がある。 古代末の周溝墓より完形の白磁、土師器が出土した。		
要約	<p>大浦遺跡は、都城盆地南部の都城市梅北町に所在し、鶴塚山系から派生した標高約 200m のシラス台地上に立地した遺跡である。調査の結果、縄文時代早期～中世の複合遺跡であることが判明した。</p> <p>縄文時代早期は深鉢片が数点出土したのみである。縄文時代晩期の遺構では、竪穴建物跡が、1軒あり、遺構内や遺構周辺からも土器・石器が出土している。</p> <p>弥生時代の遺構は検出されず、弥生土器片や石器が出土したのみである。</p> <p>古代から中世の遺構では、2個の完形の遺物が出土した周溝墓や7棟の掘立柱建物跡、土坑があり、活発な活動を見出すことができ、集落構造の一端を捉えることができたことも大きな成果である。</p>							

---

---

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第253集

## 大浦遺跡

県道飯野松山都城線(都城志布志道路)金御岳工区道路改良工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書2

2020年3月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター  
〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地  
TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660

印刷 株式会社ヒダカ印刷  
〒880-0862 宮崎県宮崎市潮見町13-5  
TEL 0985(28)4113 FAX 0985(24)8451

---

---

Miyakonojo City

# Ooura Site

The Report of Excavation by Miyazaki Prefectural Archaeological Center  
vol.253

2020

Miyazaki Prefectural Archaeological Center